

## 南九州における古墳の出現と展開

柳沢 一男

(宮崎大学教育文化学部)

### はじめに

九州島の南部をしめる南九州地方（宮崎、鹿児島県＝律制の日向、薩摩、大隅国。以下、断らない限り律制の行政区分名を使用する）は、通有の高塚古墳分布の最南端域である。その南は弧状に点在する南西諸島が点在し、台湾・中国南部地域への海上交通の起点の位置にある。

九州島を北西～南西に走る中央構造線（1000m級の山塊が連なる九州山地）の南方域は山地が卓越し、沖積低地は河川の下流域や内陸部の盆地などに広がる程度にすぎない。高塚古墳は（南九州には表示程度の盛土と明確な墳丘をもつ古墳が併存するため、後者をこのように呼ぶことが多い）は鹿児島県薩摩半島中南部と山間部を除いてほぼ全域に認められるが、九州中北部と比べて相対的に希薄である。ただ、東海岸側の日向灘～志布志湾沿岸域平野部は200基弱の前方後円墳と1500基あまりの中小円墳が分布し、日向中部の宮崎平野部と大隅南東部の肝属平野部での集中度がたかい。山地が大半を占める薩摩・大隅・日向の内陸部は高塚古墳がほとんど築造されることがなく、狭隘な盆地を中心に地下式横穴墓・板石積石棺墓が盛行する。なお薩摩地方の西海岸側の高塚古墳分布は川内川流域<sup>せんたい</sup>までで、川内川流域以南の薩摩半島は高塚古墳・地下式横穴墓・板石積石棺墓のいずれも未確認で（指宿市弥次ヶ湯古墳は例外）、基本的に古墳系墓制が築造されることがなかった地域である。

日向・大隅地方に築造された古墳群は、原<sup>はら</sup>と呼ぶ段丘面や沖積微高地での群集が特徴的である。なかでも多数の前方後円墳を含む西都原・祇園原・持田・川南・本庄、塚崎・唐仁古墳群などが町名である。南九州では高塚古墳の大半がいち早く史跡指定等を受けたため調査例が少なく、地下式横穴墓や板石積石棺墓（地下式板石積石棺墓）の調査・研究に対して立ち後れが目立つ。

日向地方における高塚古墳の調査は早く、大正初期の西都原古墳群や延岡市南<sup>みなみ</sup>方古墳群に始まる。1980年代までの調査・研究成果は、『宮崎県史』資料編・考古2（宮崎県93）、同通史編・原始古代1（宮崎県97a）や、長津（長津92）が詳しく紹介している。

1990年代に入り高精度の前方後円墳測量図を掲載した『宮崎県前方後円墳集成』（宮崎県97b）が作成されたほか、国史跡の西都原・祇園原・生目古墳群の保存整備に伴う調査が進行し、前方後円墳に関する情報量は飛躍的に増加している。また、これまで取り組みが十分でなかった円筒埴輪（有馬01）、刳抜式石棺（林田95）、横穴墓や地下式横穴墓と中小円墳含めた群集墳（藤本98、01）などの研究が進展し、墓制を多面的に論じられるようになりつつある。

薩摩・大隅地方の高塚古墳の調査はきわめて少ない。近年、大隅地方では唐仁大塚、横瀬大塚などの大型前方後円墳や塚崎古墳群の前方後円墳の測量成果が相次いで公表され（池畑92、中村97）、列島山南端の前方後円墳の状況が判明しつつある。

薩摩地方では、池水寛二の西海岸北部長島・阿久根地方の一連の調査によって高塚墳の実態が明らかにされたほか（池永81）、本格的な構造をもつ竪穴式石槨墳（阿久根市鳥越古墳）の発見もあった（中村92）。高塚古墳分布南端の川内川下流域では、竪穴系墓室に加えて纏向型に類似する端<sup>はしのりょう</sup>陵と中<sup>なかのりょう</sup>陵古墳の存在が明らかとなり（池畑92）、議論をよんだ。また、高塚古墳分布域外と考えられてきた薩摩半島南端で、開聞岳火山灰下から円墳（指宿市弥次ヶ湯古墳）が検出されたことは、境界域における首長間交渉を考えるうえで重要な手がかりとなるだろう。

もう一つの墓制である地下式横穴墓や板石積石棺墓（地下式板石積石室墓）は明確な墳丘を伴うものが少なく、偶然の発見に調査が多い。これまで相当数の調査例が積み重ねられてきたが、前者は01年に九州全域の集成が行われ（九州前方後円墳研究会01）、また後者は西健一郎の基礎的研究（西88）によって、築造過程の輪郭のおおよそが見通せるようになった。

従来の南九州古墳研究の大勢は、二つの分野に区分できる。ひとつは、日向中部～大隅地方の海岸平野部に展開する前方後円墳群や大型古墳群の形成過程とその背景・性格をめぐる問題、もうひとつは、内陸部を中心に分布する地下式横穴墓や板石積石棺墓の出自や形成過程、被葬者集団、地域社会論、これに加えて高塚古墳との関係をめぐる問題である。こうした問題設定には、古墳分布域の境界域における在地首長と王権の関係、また他地域首長間との関係把握に狙いがあることはいうまでもない。換言すれば、王権が境界域をどのように認識したか、また在地勢力がどのように対応してきたかという課題に迫ることであろう。

## 1. 古墳出現期～前期の首長墳系譜

### （1）古墳出現期前夜の墓制

南九州における弥生後期の墳墓資料は土壙墓が主体だが、日向地方の宮崎平野部では後期後葉～庄内式併行期にかけて円形・方形周溝墓＝低墳丘墓が出現する。高鍋町東平<sup>ひがしひらした</sup>下遺跡、新富町川床<sup>かわとこ</sup>遺跡、宮崎市生目<sup>いきめ</sup>古墳群で確実に弥生終末期にさかのぼる方形・円形周溝墓、土壙墓群が、また西都原古墳群で弥生終末期にさかのぼる可能性をもつ低墳丘墓がみとめられる。東平下や川床は、周溝墓群と土壙墓群が混在し、築造時期も後期後半～庄内式併行期、布留式古段階に継続する群集墓である。個々の墳墓は供献土器や副葬品が少なく、築造年代確定が困難なものも多い。以下、概要を記す。

東平下遺跡は円形周溝墓8・方形周溝墓2・土壙墓10の存在が推測されているが、発掘調査を行ったのは1号円形・2号方形周溝墓のみで墳墓群の全容は不明である（岩永編86、日高・山中82）。1号周溝墓は木棺下部に沿って配石し、鉄刀1が副葬され、遺体上半部に朱の散布がみられる。供献土器から1・2号とも庄内式併行期と推定されている。

川床遺跡は円形・方形周溝墓23（円形が主）と172基におよぶ木棺墓・土壙墓が調査されている（有田86）。川床の周溝墓は一辺が20m前後の円形のもの（3基）、15m前後の円形のもの（7基）、10m以下の円形・方形・不整形のもの（13基）と規模のうえで多少の格差がみられる。大型周溝墓は一定間隔をもって分布し、小型周溝墓は重複するほど密集するところもある。膨大な数の土壙墓は周溝墓を取り巻くように築造されている。周溝墓の埋葬施設は1例を除いて1基の単独葬、土壙内に据付型の箱形木棺を埋置したものが多い。土壙墓は2段墓壇の木蓋構造や、木棺を埋置したものがある。周溝墓の14基、土壙墓の74基に副葬品がみられる。すべて鉄器で、短

剣・刀子・鉈、刀子・鉄鏃などの小型品が多いが、大型円形周溝墓には素環頭大刀や鉄剣などがともなう。周溝から出土した供献土器から、後期後葉から布留式古段階まで継続したらしい。

生目古墳群では高塚墳集中域から離れて、円形周溝墓群と土壙墓群が地点を違えて分布する。副葬品、供献土器が皆無に近いので詳細不明だが、前方後円墳成立期前後の築造と想定される(中山・久富編96)。

西都原284号墳(旧無号B号)は、直径約10m、高さ1mあまりの低い墳丘を呈する。大正5年の調査で墳丘内から弥生終末期の土器(口縁部に波状文がある二重口縁壺が主)が出土したが、埋葬施設は不明であったという(濱田・梅原31)。土器構成の特異性から、石川悦夫は終末期墳丘墓の可能性を指摘している(宮崎県総合博物館編88)。墳丘墓と断定できる積極的な根拠はないが、土器の器種構成や立地からもその可能性がたかい。しかし規模は小さく、周溝墓ないし台状墓の範ちゅうで理解できるものであろう。

また、これまで定型化以前の前方後円墳かとみられてきた国富町下屋敷1号墳は、供献土器が布留1式期併行段階まで下る可能性があるので取り上げない(松永01)。不定形の円墳とみるべきであろう。

以上のように、宮崎平野部では弥生後期後葉から布留式古段階にかけての群集墓内に、円形ないし方形周溝墓が出現し盟主的な位置をしめるが、とても吉備や讃岐地方にみられるような明確な首長墓制を確立したとは言い難い。ただし未発見の資料も予想されるので今後の調査に期待したい。

## (2) 前方後円墳の出現と展開

南九州の古墳出現期は不明な部分が多い。02年に木槨が確認された<sup>あおき</sup>億1号墳はまだ築造年代が不確定で、槨の詳細や副葬品なども不明である。ここでは、既知の古墳資料をもとに前方後円墳の出現期とその後の築造過程を検討する。まず代表的な3つの古墳群を取り上げよう。

### 【西都原古墳群】(宮崎県西都市)

一ツ瀬川右岸に位置し、標高60mの段丘面から沖積微高地にいたる東西2.6km、南北4.2kmの範囲に330基を上回る数の高塚墳が分布する。前方後円墳31基のうち、大正年間に6基、保存整備関係3基の計9基が発掘調査されている。

詳細は略すが、前期～中期初頭までの西都原古墳群は、7つの首長墳系譜が併存する複数系列型の構成である。最小1基(G群)、最大6基(A・B群)が築造され、墳長50～80m程度のものが多いが、古墳の数と墳丘規模のうえで、A・Bの二つのグループが他に対して優位な位置にある。

Aグループ6基の前方後円墳のうちの5基が発掘され、内容がもっとも判明している。しかし4基は大正期の調査にとどまり、埋葬施設の構造や副葬品の細部や、墳丘構造の詳細はわからない。埋葬施設まで調査がおよんでいるものは4基ある。このうちの13号墳は再発掘され、墳丘の段築構造や壺形埴輪の配列、墓壙の一端の作業用通路の存在などが確認された。出土した供献土器は布留2～3式併行期と推測され、集成編年の3期後半頃と位置付けられる(石川01、柳沢95)。

56号墳を除いて鏡が副葬され、72号墳は魏鏡の可能性がたかい方格規矩鏡、13号墳が倣製三角縁神獸鏡、35号墳は倣製方格規矩鏡らしいが、これだけで相互の先後関係を確定するには材料不足である。そこで墳形に着目すると、小型で本来の原状をどの程度遺存しているか不安な56号墳

を除く5基は、前方部形態に著しい差異が観察され、その違いに時期的変遷を予測しうる。そのうち前方部頂が高く発達した46号は、大分県亀塚古墳と相似形の可能性がありもっとも後出する可能性がたかい。未調査の1号墳を含む調査古墳の4基は多少の違いがあるが後円部に対して前方部が低く、墳形からもおよそその年代観を支持しうる。

すでに一定の成果をあげている前方後円墳の墳形研究（澤田91、岸本92）に学びながら墳形変化の様相を検討すると、1号墳が西殿塚類型、72号墳は行燈山類型に近似する可能性がたかいと判断される。これに対して、13号・35号墳の2基は前方部が異様なまでに狭長な形状をしめし、これまで柄鏡式古墳ないし柄鏡形（式）前方後円墳と呼ばれてきたものである。

この一群を柄鏡形類型と呼び、変異が大きい前方部立面形を基準にすると、つぎの三種に区分できる。前方部頂の高さが、①後円部高の1/2以上のもの（a類）、②後円部1/2となるもの（b類）、③1/2以下のもの（c類）である。a～c類に該当する調査古墳のデータを検討した結果、おおむねa→b→c類、言い換えれば前方部頂高の通減化という変化が認められ、その築造時期はおおよそ3期後葉から5期前葉頃までに限定される可能性がたかい（柳沢95）。

以上の成果に基づけば、Aグループの前方後円墳は1号→72号→13号→35号→46号という築造推移が推測され、この一群が世代を継いで築造された首長墳系列と認めることが可能である（小型で墳形不明の56号墳は除く）。同様にBグループをみると、Aグループにみられない纏向型類型（81号墳）や箸墓類型（90号墳）があるが、その後は行燈山類型→柄鏡形類型という墳形変化をたどる。他のグループは、前方後円墳の出現時期やその後の築造過程は多様だが、こうした墳形変化から大きく逸脱するケースはないと考えてきたが、後述するように墳形変化の一部は見直しが必要となっている。その問題はさておき、西都原ではグループ間で築造開始期に多少の違いがあるが、前期～中期初頭（5期前半）にいたるまで、複数のグループが墓域を異にしなから前方後円墳を築造し続けたとみることができる（柳沢95、00a）。

整備に伴いCグループ最古段階（箸墓類型）と想定した100号墳が発掘調査され、後円部3段、前方部2段の墳丘構造が明らかになったほか、壺形土器や高杯などの土師器が出土している（松林02）。久住猛雄から100号墳は13号墳よりも新しいのではないかの指摘を受け、改めて土器を観察した結果、久住の見解が妥当と判断されたため、100号墳は13号墳後に位置付けを訂正したい。したがって、これまで私が箸墓類型とみた前方後円墳の墳形は全面的に見直す必要があるが、墳丘の現地調査と墳丘実測図の検討だけでは限界があり、積極的な確認調査の実施を要望したい。

#### 【生目古墳群】（宮崎県宮崎市）

大淀川下流右岸のシラス台地上に総数29基の高塚墳が遺存し、墳長100m以上の3基を含む6基が前方後円墳である。従来、これらの前方後円墳は5世紀代の築造と推測されてきたが、墳形の検討から前方後円墳の大半が古墳時代前期にさかのぼる可能性がたかい（柳沢95、99）。現在、史跡整備にともなう調査がすすめられ、これまで推測の域を出なかった首長墳系譜の形成過程を具体的に議論できるようになったことは重要である（宮崎市03）。今後の調査の進展をまたねばならないが、8期の7号墳を除いて、前期～中期初頭とした想定を大きく変更する必要はなさそうである（柳沢95、98b、01）。

本古墳群の場合、1号墳は箸墓類型、14号墳が西殿塚類型、3号墳は渋谷向山類型、また22・23号墳は柄鏡形類型のb類ないしc類と想定され、西都原と同様な墳形変化をしめす。換言すれ

ば、連続する古墳築造の可能性がたかく、単系列の首長墳系譜とみてよいだろう。

なお、1号墳(約130m)、3号墳(約140m)は、南九州の前期古墳のなかでは突出した規模である。22号墳は120m弱と柄鏡形類型のなかでは第2位クラスだが、いずれにしても前期に傑出した規模の前方後円墳を輩出した首長墳系譜と位置付けられる。

#### 【塚崎古墳群】(鹿児島県肝属郡高山町)

大隅半島北端を流れる肝属川右岸の低台地上にあり、古墳分布域最南端の前方後円墳群である。45基の高塚墳が現存し、そのうちの4基が前方後円墳である。近年、琉球大学・鹿児島大学が中心となって行った4基の前方後円墳の測量図が公表された(中村97)ほか、02年に新たに前方後円墳が確認され、計5基の前方後円墳を含むことが判明した(琉球大学池田榮史氏のご教示による)。

4基の前方後円墳の測量成果は、これまで5世紀代と推測されてきた築造時期の全面的な見直しが必要である。すでにその概略は述べたことがあるが、要点を記すと、この前方後円墳群の築造は纏向型タイプの11号墳に始まり、箸墓タイプの16号墳、西殿塚タイプの11号墳、五社神タイプの40号墳へと継続する単系列首長墳系譜の可能性を指摘しうる(柳沢99)。02年に確認された前方後円墳の詳細は不明だが、この系列のなかに入るものであろう。

#### (3) 日向・大隅地方首長墳系譜の築造過程

日向・大隅地方の前方後円墳は内容が判明しているものがきわめて少なく、築造年代の推測は困難が伴うが、上記の3古墳群での墳形をベースとした作業を踏まえての当地方の主要古墳群の変遷過程をしめすと図7-2のようになる。限られた資料をもとにしているため、誤りが少なくないと思われるが、おおよそに大過なければ、形成端緒が前期にさかのぼる系列が多いことになる。現状資料によって、日向・大隅地方の前期にさかのぼると想定される首長墳形列は約30、そのうち小丸川・一ツ瀬流域ではほぼ20単位前後が前期にさかのぼる(西都原の前期7系譜も加えている)と想定している。当地域の首長墳系譜で、墳長80mを超える規模の前方後円墳をふくむものは、西都原・持田・川南・などの有力な系譜に限られ、大半は墳長30~60m程度の小型墳で構成されている。空間的に限られた小範囲に、これほど前期段階の首長墳系譜が集中する地域はきわめて稀であろう。

このなかで注意されるのは、生目系譜のように墳長が100mを上回る前方後円墳(130~140m)が継続し、とくに1・3号墳の段階で他系譜とのあいだに圧倒的な墳丘規模格差がみとめられることである。また、格差はやや縮小するとはいえ柄鏡形タイプの段階でも、墳長140m程度の前方後円墳がほぼ世代程度の年代をおいて築造されたことも見逃し得ない。

こうした前方後円墳の墳丘規模にみられる格差を、墳形と規模による首長層間の序列表示と理解する立場(都出89)にしたがえば、日向・大隅地方の広い地域を貫く規模格差を支える原理は、最大規模墳の被葬者を頂点とする諸地域首長層の政治的結集体=首長連合の形成と、構成首長層の序列表示に求めることができるであろう。その頂点に位置する首長を盟主的首長、その墳墓を盟主的首長墓ないし広域首長墳とすれば、生目1・3号墳は、前期初頭~中葉段階の日向・大隅にわたる首長連合を束ねる広域盟主墳とみてよいであろう(柳沢95、00b)。

また前期後半には、柄鏡形タイプの墳形が宮崎平野部を核として日向・大隅地方の全域に広がるが(図4)が、分布の南北端にあたる五ヶ瀬川と肝属川流域は築造数が少なくかつ後出的である。

この墳形が宮崎平野部首長層主導のもとに創出されたことをしめしている。

柄鏡形類型段階は多くの首長墳系譜で大型墳を築造している。墳長100mを超えるものだけでも7基を数えるが、墳長140m前後の2基の最大規模墳は分布域の南北両端に築造されている。b類段階は五ヶ瀬川流域の菅原神社古墳、c類段階が肝属川流域の唐仁大塚古墳である。唐仁大塚古墳に採用された竪穴式石槨内蔵の剝抜式石棺は、棺蓋の形状や小口側の縄掛突起の特徴から阿蘇石を使用した五ヶ瀬川下流域製と推測され、最大規模墳のあいだに密接な関係が想定される。また2基とも、先行する首長墳群の墓域から離れた位置に移動している点も共通する（〔北部〕天下古墳群→菅原神社、〔南部〕塚崎古墳群→唐仁大塚）。

このように柄鏡類型最大墳が宮崎平野部の古墳中枢域を離れ、南北両端域に登場する背景の解釈は難しいが、柄鏡形類型墳の出現と軌を一にして生目系譜が衰退し始めることに留意したい。つまり、生目系譜の衰退に伴って柄鏡形類型b類段階の広域盟主の地位は五ヶ瀬川下流域勢力に、c類の段階では南部・肝属川下流域勢力へと移動したとみるほかない。こうした南北両端域における最大規模墳の移動は、柄鏡形類型段階の首長連合内で激しい勢力再編があった可能性をしめすものであろう。

## 2. 中期（5～8前半期）一首長墳系譜の変動と首長連合の解体―

5期の前半まで多数が築造された柄鏡形類型の前方後円墳は、その後半に築造を停止した。その契機は、西都原古墳群での女狭穂塚古墳の登場にあると思われる。

女狭穂塚は墳長約180m、後円部・前方部ともに三段築成、くびれ部に造出を設け、二重の周堀をめぐらす。外堀に沿って1基の陪冢（171号墳・方墳/一辺26m）をともなう。円筒埴輪に加えて各種の形象埴輪を採用し（福尾85、高橋93）、墳形は大阪府仲津山古墳の2/3規格の相似形である（岸本92、柳沢95）。先行する前方後円墳と比較して異例づくめの属性を備える。この女狭穂塚の築造を契機に南九州の首長墳系譜に大きな変化がみられる（柳沢95）。その具体相を要約すると、つぎのとおりである。

①西都原古墳群では先行する7つの首長系譜の築造が途絶え、女狭穂塚出現後に築造を継続する系譜はみとめられない。これとともに、一ツ瀬・小丸川流域の小首長墳系譜も衰退する。

②前期段階に南九州最大規模墳を造り続けた生目系譜の前方後円墳の築造が、女狭穂塚と前後する時期の5号墳をもって中断する。

③長期継続型の持田・川南系譜では、帆立貝形古墳への転換や墳丘規模の縮小が顕著である。他方、本庄系譜では前段階よりも墳丘規模が一回り大型化する。

④女狭穂塚にやや遅れるが、先行して首長墳系譜がみられなかった地域（宮崎県塩見川流域、石崎川流域、本庄川支流域）に、中小前方後円墳や大型円墳からなる小首長墳系譜が出現する。

⑤女狭穂塚の墳形を基準としたと大中型前方後円墳が小首長墳系譜に登場する（茶臼原古墳群/児屋根塚古墳、祇園原古墳群/大久保塚古墳）。

⑥大隅地方の唐仁系譜では、大塚の後、前方後円墳の築造が一時中断したらしい。この間、岡崎古墳群や神領古墳群などの小首長系譜が出現した可能性がある。

以上の多くの変化は偶然の重なりでなく、相互に関連した一連の現象とみるべきであろう。なかでも柄鏡形類型墳の築造が停止したことは重要である。女狭穂塚は墳形や埴輪祭りに畿内大型

前方後円墳の最新モードを採用しており、その築造にあたっては王権側から工人が派遣されたであろう。女狭穂塚が破格の規模をもつことは、王権の南九州に対する関心の深さと女狭穂塚を築造した勢力との密接な関係をしめしている（柳沢95、00）。

この点で女狭穂塚の築造は、一ツ瀬川勢力（西都原勢力を中枢として、女狭穂塚と同企画の前方後円墳を築造した茶臼原・祇園原勢力を含む）による、柄鏡形類型の墳形の表象とする首長連合の解体と再編を象徴するものであろう。一方、この時期の九州には仲津山類型の大型前方後円墳が各地に出現する。中部の熊本県岩原二子塚古墳（104m）、佐賀県船塚古墳（110m）は仲津山類型墳とみられる（柳沢00b）。九州中北部でも、この期を境にして前方後円墳の規模縮小や首長墳系譜の断絶などが顕著となり、とくに首長墳系譜の減少が顕著である（柳沢92、重藤98、高木・蔵富士95、田中95）。

こうした劇的ともいえる4～5期の首長墳系譜変動は、九州にとどまらず多くの地域で指摘されており、都出比呂志が提起した列島規模の首長墳系列の変動（都出88、99）のうち、大王墳が大和盆地から河内平野への移動に伴う変動に関連するものであろう。その具体相が仲津山類型の拡散現象に表出されたのではないかと想定される（柳沢95、00b）。

女狭穂塚に後続する男狭穂塚古墳の後、西都原での前方後円墳築造はしばらくのあいだ中断するらしい（詳細がよく分からない段丘中段域の前方後円墳内容が判明すれば訂正が必要となるかもしれない）。西都原の最上段台地上に前方後円墳が復活するのは9期以降である。

6・7期における首長墳系譜激減のなかで、男狭穂塚に後続する広域盟主墳は大隅地方の横瀬大塚古墳に移動する。横瀬大塚は墳長約140m、IV期の埴輪をもち、7期の築造である。埋葬施設は石棺を内蔵した竪穴式石槨らしい。くびれ部造出や段築構造などが不明だが大山古墳の1/3規格の相似形墳の可能性がある。この横瀬大塚をもって、前期以来継続した140m級の大型前方後円墳の築造が終わり、広域首長連合は解体したか著しく衰退したかのいずれかであろう。横瀬大塚に継ぐ段階の大型墳は一ツ瀬川流域の松本塚古墳に移動する。墳長104mと規模の縮小は免れないが、軽里大塚古墳と3/5規格の相似形墳で、周堀外方に数基の陪冢を伴うことは、なお王権との一定の関係は維持されたのであろう。

#### 4. 後期とその後

##### (1) 広域盟主墳の消滅と首長墳系譜の変動

松本塚古墳ののち、南九州では隔絶した規模の前方後円墳が姿を消し、長期継続型系譜（持田・川南・本庄）で小型前方後円墳の築造が継続する一方、大・中型の前方後円墳で構成される首長系譜が宮崎平野部に登場する。また内容は不明だが、先行する首長墳がなかった小地域を単位に中・小型前方後円墳からなる首長墳系譜が周縁域に出現する。外縁地帯の北部・五ヶ瀬川下流域や南部・大隅地方では後期に下る明確な前方後円墳は姿を消すらしい（TK43～209型式期の須恵器を出土した小牧1号墳は前方後円墳の可能性が少ないため除外した〔池畑92〕）。

後期前方後円墳の築造状況はいくつかの類型に区分できる。

第1は、長期継続型系譜で中小型前方後円墳が埴輪消滅期前後まで継続するもの。持田・川南・本庄では5期の埴輪を樹立する前方後円墳があり、複数の後期前方後円墳が築造されたことは間違いないが、築造過程の詳細はわからない。墳丘規模は40～60m級で推移する。

第2は、中期前葉に衰退した首長系譜に、後期初頭前後を前後して小型の前方後円墳が築造される。生目や西都原の系譜などがある。生目では50m級の小型前方後円墳（7号）が築造されるが、その後に継続しない。西都原では、台地上の以前の墓域から離れて船塚（265号/58m）が出現するほか、中段域のJ・K群で少数の中小前方後円墳が築造されたようだが詳しいことはわからない。いずれにしても西都原の後期段階の前方後円墳は散発的な築造で、先行系譜との関係は不明瞭で、かつ安定した築造系譜をみとめることは困難である。

第3は、それまで首長墳を築造しなかった地域に新たに中小規模の前方後円墳が出現するもの。宮崎平野部南端の清武川流域の木花古墳群は、30～50mの2基の前方後円墳（1基はV期の埴輪、もう1基は埴輪不明）と周囲に数基の小円墳を伴うが、未調査のため詳細不明。

第4は、中期中葉頃に衰退した首長墳系譜に、後期初頭を前後して大型前方後円墳が出現し、その後埴輪消滅期にいたるまで前方後円墳を築造するもの。宮崎平野の北部・祇園原古墳群と南部・下北方古墳群が該当する。両古墳群とも60～100級の大型前方後円墳が継続的に築造され、南九州の後期を代表する首長墳系譜である。

以上のように、広域盟主墳が消滅した後期段階の首長墳系譜は、中期のそれと異なった様相をしめす。つぎに、第4に述べた新たな大型首長墳系譜を検討しよう。

## （2）地域政治構造の新たな枠組み

宮崎平野部の南北に登場する二つの系譜は、8期後半～9期にかけて出現した墳長100m前後の大型前方後円墳を契機として、前方後円墳の築造が本格化する。前者の霧島塚古墳と後者の下北方13号墳は、丘陵尾根上の選地や特異な墳形や葺石の未使用などの類似点が多く、共通の企画のもとに築造された可能性がある。霧島塚は未調査だが、下北方13号は5期の円筒埴輪のほか舟形や動物・人物形などの形象埴輪が出土している。

祇園原古墳群は、霧島塚に後続して墳長60～100m級の前方後円墳4基（59号/71m、百足塚古墳/80m、68号墳/62m、弥五郎塚古墳/94m）と、60m未満の前方後円墳4基が併行して築造された複数列型で、両者のあいだに一定の階層差をみとめることができる。8基の前方後円墳中6基にV期の埴輪が伴い、そのうちの2基に最下段断続ナデ手法がみとめられる。現在調査進行中の百足塚から多量の形象埴輪が出土し、その構成内容や配列手法に大阪府今城塚古墳との近似点が多いことは重要である（有馬02）。

これに対して下北方古墳群は、13号墳に後続する前方後円墳は6号墳（約60m）と船塚古墳（84m）の2基の前方後円墳にとどまり、古墳築造の間隔があくようだ。周辺が市街地されているために、すでに消滅した前方後円墳があった可能性もあるだろう。6号にはV期の円筒埴輪が伴う。船塚は葺石・埴輪とも不明でおそらく最後の前方後円墳となる。

近年の祇園原古墳群の調査によって、ようやく後期最大規模の首長墳系譜を構成する古墳内容の一部が知られるようになったことは貴重である。上記の2古墳群以外は、墳丘規模が40～60m級にとどまり、この二つの首長系譜との格差は顕著である。

中期から後期への移行期を前後して新たな中小首長墳系譜が増加する現象は、九州の多くの地域でみとめられる（柳沢92）。また、後期初頭～前葉に始まる大型前方後円墳からなる首長墳系譜には、筑前宗像地方の須多田系譜、筑後八女地方の八女東部系譜、筑後東部の浮羽系譜、肥前東部の鳥栖系譜、豊前北部の黒田・勝山系譜、肥後南部の野津系譜などがある。これらは多少の



差異があるけれどもおおよそ前方後円墳の停止段階まで継続し、周辺の首長墳系譜と墳丘規模と継続性に歴然とした格差をもつ。このように律令制の一国程度の範囲に、安定的な造墓を続ける1ないし2程度の有力首長墳系譜の様相は、広域盟主墳の移動が著しかった前・中期段階と異なった政治過程を表示するものだろう。盟主的地位が特定首長勢力の狭い範囲で固定化がすすむあり方は、のちの国造制につながる可能性があるのではあるまいか。

### (3) 前方後円墳の停止とその後の首長墳

宮崎平野部の前方後円墳は、TK43~209型式のうちにはほぼ築造を停止する。代表的な最終段階の古墳をあげると、西都市千畑古墳(墳長約40m、横穴式石室。副葬品はないが石室構造からみてTK43型式期と推測)、西都原202号墳(姫塚、52m。後円部に3、前方部に1の木棺直葬がある。中心施設は横穴式石室か?。最古の木棺直葬はTK209型式期)、祇園原・弥五郎塚(96m)、石舟(新田原)45号墳(約50m、横穴式石室)、宮崎市船塚古墳(86m)などがあり、いずれ墳丘外表に葺石や円筒埴輪を伴わない。

前方後円墳に後続する大型墳は円墳・方墳に変化するが、地域や首長墳系列によって選択した墳形が異なるらしい。一ツ瀬川流域は方墳が優位で、円墳は船塚の後継墳の鬼の窟のみである。祇園原系譜や石舟系譜は一辺約25mの方墳を築造している(祇園原(新田原)138号墳、石舟(新田原)44号墳)。また、三財川流域に出現した西都市常心塚古墳は一辺約25mの方墳だが、上記例と異なって周辺に先行する首長系譜がみられない。

大淀川流域では、右岸の河口近くに直径40m前後?の福長院塚古墳(円墳。内容不明だが大型石材を用いた石室の一部がみられたという[田中93])と、広渡川河口域の砂丘上に築造された日南市狐塚古墳(規模不明)がある。前者は先行する下北方系譜最後の船塚古墳からの距離はあるが、同一系譜上の首長墳であろう。後者の狐塚古墳の場合、広渡川流域部に古墳そのものがきわめて少なく、先行する首長墳系譜をみとめることができない。

以上の古墳のなかで、埋葬施設が判明しているものはすべて大型の横穴式石室で、不明のものも横穴式石室の可能性がたかい。築造年代が判明しているものは、鬼の窟がTK209~隼上りI式、石舟(新田原)44号墳は隼上りII式、狐塚が隼上りII式である。未調査で内容不明の古墳も隼上りI~II式期と推測され、宮崎平野部では7世紀中葉を前後して首長墳の築造は停止するとみてよいであろう。

なお先述したように、日南市狐塚や西都市常心塚は周辺地域に先行する首長墳がみとめられない。築造時期が7世紀中葉前後であることを考慮すると、先行首長系譜の延長上の築造とは異なった築造背景を考慮する必要があるかもしれない。

## 5. 地下式横穴墓の出現と展開

地下式横穴墓は、中期前葉頃に日向・大隅・薩摩・肥後の境界域にあたる川内川上流域のえびの盆地に出現したのち、おおよそ7世紀中葉頃にいたる250年前後のあいだ、南九州を特徴付ける墓制として継続した。01年までに判明している南九州の地下式横穴墓は、肥後2、薩摩44+ $\alpha$ 、大隅99+ $\alpha$ 、日向832+ $\alpha$ 、総数977+ $\alpha$ である(九州前方後円墳研究会01)。しかし、もともと壮大な墳丘を伴うことが少ないため未発見のものが多く予想され、本来の築造数はその数倍に達するであろう。かつては構造が類似する中世後半の地下蔵(地下式土坑)を地下式横穴墓と誤

認する例もあったが、福岡県の一部（嘉穂地方）や栃木県真門市に確実な地下式横穴墓例が判明しており、墓制拡散の視点からの実態説明がまたれる。

### （1）地下式横穴墓の成立と展開過程

地下式横穴墓は一般的に土師器・須恵器などの容器類の副葬例がきわめて少なく、築造時期の判定に困難なものが多い。これまで、その成立過程について中国の磚室墓を源流とするなどの憶測が提出されたこともあった（石川83）が、えびの市こきばる・蕨地区の調査資料は形成過程を明快にしめす画期的な資料である（永友90、中野96）。なかでも、土壙墓の長側辺に堅坑を掘り込み、その底面から墓室にいたる横口部を設けた”横口式土壙墓”は、地下式横穴墓の祖型と評価できる（布留3～4（古）式期併行か）。中野和浩は、この横口式土壙墓の墓室を地下に掘削することで地下式横穴墓が成立したと想定している（中野97）。妥当な見解であり、九州中北部に盛行しつつあった横穴式石室を受けて案出された墓室構造とみたい（西谷87）。直接の系譜は肥後地方南部にあると思われるが、追葬可能を可能とするアイデアを取り入れ、先行墓制を改変してあらたな埋葬施設を生み出したともいえよう。

地下式横穴墓の成立時期は、列島での須恵器生産開始期をわずかにさかのぼる頃と予想される（和田01）。初現期の地下式横穴墓は横口式土壙墓の形態を継承し、墓室の平面形は横長長方形、天井は低く平天井である。こうした構造例はえびの盆地と東側に接する岩瀬川流域に集中し、地下式横穴墓が当該地方で形成されたことをしめしている。その後、地下式横穴墓は急速に南九州各地に拡散するが、普遍的に副葬される鉄鏃と墓室の型式変化を手がかりに拡散課程を追跡した和田理啓の作業は重要である（和田01）。

以上の研究成果によれば、地下式横穴墓は成立後さほどの時間をおくことなく、日向・大隅の地下式横穴墓分布域の大半に展開した可能性がたかい。高塚墳が優勢な宮崎平野部でも、生目、国富町むつのぼる六野原、高田原、木脇塚原、都城市志和池しわちちくけい（築池）などが初期須恵器や陶質土器を墓室内外に伴う。墓室形態の判明している例はすべて、墓室が横長長方形の平面形で平天井構造を特徴とし、初現期の墓室形態をもつ。

初現期以降、地下式横穴墓が盛行したえびの盆地・岩瀬川流域では、玄室プランの方形化が進行する過程で屋根形天井・軒下の棚状施設なども考案され、分布の全域に波及した。こうした一連の墓室構造変化は、肥後地方の横穴式石室や家形石棺などからの情報を得たのものであろう。一方、5世紀後葉に宮崎平野部・大隅地方では長大な縦長長方形の墓室が出現する。大隅地方では、玄室内に軽石の板石組合せ石棺を設置するものがある、こうした属性は日向地方や内陸部におよぶことはなかった。

### （2）地下式横穴墓の副葬品構成

一般に地下式横穴墓の副葬品は相対的に少ないが、甲冑の副葬例が顕著である。これまで短甲出土例は18基22領、そのうちえびの盆地のえびの市島内、小木原の2地区から7基7領（+2基2領）、宮崎平野部では六野原3基各1領、本庄地区4基各1領のほか、西都原では1基から3領、下北方2基から計3領である（九州前方後円墳研究会01）。とくにえびの盆地は先行する古墳系墓制そのものを欠いた地域である。橋本達也が指摘するように倭王権の新たな軍事編成に伴う短甲集積であろう（橋本02）。また蛇行剣が22基から出土しているのも特徴としてあげることができよう。しかしこうした威信財を副葬するものは全体の数%にすぎず、刀子や鉄鏃だけの副

葬例が圧倒的に多く、通有の中期小古墳の副葬品と近似するが、鉄鏃に圭頭斧箭が多いことは特徴的であろう。こうした副葬品の組合せから、北郷泰道は地下式横穴墓社会の階層構造を論じている（北郷86）。

また内陸部の地下式横穴墓に貝輪の副葬（着装）例が多いことも注意されてよい。繁根木型ゴホウラ貝輪が2基、イモガイ製貝輪が30基、オオツタノハ貝輪が5基からそれぞれ出土している。なかでも島内では9基から42点（ゴホウラ製1、他はイモガイ製）もの集中がみられる。身体装飾の玉類は、宮崎平野部周辺を除いて基本的にみられないことと併せて注意すべきであろう（島内では6世紀代に下る15号の1例に過ぎない）。特異な品目として骨鏃の副葬もあげておこう。

### （3）渡来系文物副葬品と馬埋葬（殉葬）土壌

地下式横穴墓の副葬品に朝鮮系渡来文物がみとめられることは早くから指摘されている（西谷87）。島内25号・大萩3号・菓子野3号の鉄鐸、島内10号のコロク金具、下北方5号の金製耳飾りやハミエダ轡馬具セット・鉄柄付手斧、西都原地下式4号（110号墳）の金銅製冠？などのほか、初期須恵器ないし陶質土器の副葬例（六野原14号・高田原1号、志和池など）もある。とりわけ下北方5号の朝鮮系渡来品の豊富さは群を抜く。それらがどのような経路で被葬者の手元に集積したか不明だが、軍事・外交などの対朝鮮政策に直接関与する立場にいたか、彼地の首長層と密接な関係をもつような交渉を行った可能性も否定できない。

また馬埋葬土壌（馬殉葬土壌）を墓域内に営む事例の発見は注意を要する（島内、小木原・久見迫、築池、六野原など）。六野原8号、小木原・久見迫SK110のハミエダ轡からみて、遅くとも5世紀後葉までに、内陸部を中心として馬匹生産が開始されたと推測される（柳沢98、桃崎02、甲斐02）。後期には馬埋葬土壌例は宮崎平野部に広がり、これまで4古墳群15例が検出されている（甲斐02）。初期の馬匹生産に携わったのは渡来系集団と想定され、倭王権主導のもとに配置されたのであろう。3基の地下式横穴墓から出土している祭祀用の鉄鐸（金東淑00）は、移住した渡来集団が故地から携えてきた製品の可能性がたかい。

このような内陸部における渡来系集団による馬匹生産の開始や新式甲冑の多量集積は、朝鮮諸国間の緊張に対する軍事集団の拡大や騎馬編成重視への転換にあたって、旧来の首長勢力の影響が少なかった地域に王権が直接進出したことをしめすものであろう。そうした機会に、宮崎平野部の新興勢力首長層が関与した可能性は十分に予想されるよう。

### （4）内陸部の衰退と平野部の隆盛

5世紀に膨大な数の地下式横穴墓群を築造した内陸部のえびの盆地や岩瀬川流域、都城盆地では、後期になるとその築造が激減する。容器副葬がほとんど見られないため築造年代の推測が困難だが、岩瀬川流域で確実に6世紀に下る例は皆無、えびの盆地では島内と小木原の馬頭・久見迫・小木原の各地区に散見される程度となる（ちなみに、島内は101基のうちの10基未満、馬頭は14基中の2基、久見迫は23基中の6基）。また、薩摩地方の川内川中流域は皆無であるという（樋渡01）。

一方、宮崎平野部の地下式横穴墓は、生目古墳群と本庄川流域一帯の六野原、高田原、木脇塚原にいち早く初現し断続的に築造を継続しているが、平野部全域に広まるにいたっていない。そのなかで、TK208型式期前後に縦長長方形の墓室プランが出現したらしいことは重要だ。

宮崎平野部で地下式横穴墓が本格的に築造されるようになったのは、長大な縦長長方形プラン

の墓室を首長層が採用したことによる可能性がある。西都原地下式4号（110号墳/直径25mの円墳）や下北方地下式5号（9号墳/直径約15mの円墳）、六野原地下式10号（10号墳/直径25mの円墳）などがその初現期例の候補となる。墓室の規模が長さ5m前後、幅も2mに近く、いずれも鏡や甲冑を伴い（西都原3領、下北方2領）、金製耳飾りや金銅製冠、初期馬具などを含む副葬品内容は、8期の地域首長墳の典型的な威信財構成とみてよい。また詳細不明だが、本庄古墳群の猪の塚（墳長50mの前方後円墳、埴輪Ⅴ期）の埋葬施設とみられる地下式横穴墓から、画文帯神獸鏡を含む3面の鏡や甲冑が出土したという記録がある（池畑88）。これらが、副葬品構成だけでなく墓室構造や規模が近似することは、こうした墓室を共通にする首長層間になにがしかの関係が生じた可能性がある。

#### （5）群集墳埋葬施設を構成する地下式横穴墓とその終焉

後期段階の地下式横穴墓の様相は、近年の調査例によって従来のイメージを大きく転換させつつある。これまで、一般に地下式横穴墓はおおむね6世紀代のうちに衰退すると考えられてきたが、西都原古墳群とその周辺、祇園原古墳群、本庄古墳群、高鍋町牛牧古墳群（下耳切遺跡）などの前方後円墳を含む古墳群や群集墳域から相次いで検出された地下式横穴墓は、7世紀中葉頃まで確実に築造が継続したことを明らかにした。また大淀川下流域の自然堤防や砂堆など、築造不可能と思われるような地形上にも地下式横穴墓が営まれたことが明らかになった（九州前方後円墳研究会01）。大隅地方では地下式横穴墓の終焉時期を、横間地下式3号墓から出土した蕨手刀、銅製帯金具（巡方・丸軻）によって8世紀代まで下るとする風潮があるが、異例とみるべきであろう。当該地の調査資料をみても、最終段階の多くは7世紀中葉を前後する頃である。

高塚古墳群内の地下式横穴墓は小円墳の埋葬施設としての採用が目立つ（西都原・祇園原・牛牧など）。その多くが削平された墳丘下から検出されるため、はたして古墳の主たる埋葬施設なのか、2次的なものか判然としないものが多かったが、そうした疑問を解く素材として牛牧古墳群の調査例は貴重である。牛牧1号墳（円墳/直径約20m）は墳丘上部に4基の木棺が継続的に埋葬されたほか、埋没過程の周堀に竪坑を掘削し墓室を墳丘外方に向けた3基の地下式横穴墓が見つかっている。墳丘上の木棺はTK209～隼上りⅡ型式期、地下式横穴墓は隼上りⅠ～Ⅱ式である。墳丘内被葬者と地下式横穴墓の被葬者の関係は、どのようなものであろうか。

また地下式横穴墓をもつ高塚墳に近接して、単独に営まれる地下式横穴墓も少なくない。牛牧（下耳切）や西都原・堂ヶ島地区でこうした例が認められる。こうした宮崎平野部の後期群集墳は、横穴群、小円墳（木棺直葬、地下式横穴墓が主体）、それに無墳丘の地下式横穴墓（その存在を表す程度の表示を伴ったであろう）の混在する複雑な様相をしめす。こうした状況の評価は困難で、改めて考えることにしたい。

「南九州全体を」という事務局からの要望であったが、薩摩地方の高塚墳や板石積石棺墓（地下式板石積石室墓）を詳細に触れることができなかった。お許しいただきたい。また本稿で取り上げた古墳の報告書は膨大になるため、内容に言及したもの以外は文献目録から省略した。非礼をお詫びしたい。

【参考・引用文献】五十音順

- 有馬義人00「宮崎県の埴輪—導入と展開—」『九州の埴輪 その変遷と地域性』、第2回九州前方後円墳研究会
- 有馬義人02『祇園原古墳群6』(新富町文化財調査報告書第36集)
- 有田辰美86『川床遺跡』(新富町文化財調査報告書第5集)
- 池畑耕一88「薩摩の考古学者 白尾国柱」『黎明館調査研究報告』第2集、鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 池畑耕一92「地域の概要—大隅—」『前方後円墳集成』九州編、山川出版社
- 池永寛治81『長島の古墳—付出水地方の古墳—』、長島町教育委員会
- 石川恒太郎83「地下式古墳の源流」『考古学研究』第30巻第2号
- 石川悦夫01『西都原13号墳』(特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第2集)、宮崎県教育委員会
- 岩永哲夫編86「東平下1号円形周溝墓」『宮崎県文化財調査報告書』第29集、宮崎県教育委員会
- 梅原末治41『新田原古墳調査報告』(宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告第11輯)、宮崎県
- 梅原末治69『持田古墳群』、宮崎県教育委員会
- 甲斐貴充02「古墳時代日向の馬埋葬土壙集成」、平成14年度九州考古学会発表資料、九州考古学会
- 岸本直文92「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第32巻第4号
- 九州前方後円墳研究会01『九州の横穴墓と地下式横穴墓』、第4回九州前方後円墳研究会
- 金東淑00「嶺南地方の6～7世紀代墳墓出土鉄鐸に関する研究」『慶北大学校考古人類学科20周年記念論叢』(ハングル)
- 澤田秀実91「墳丘形態からみた権現山51・50号墳」『権現山51号墳』、『権現山51号墳』刊行会
- 重藤輝行98「古墳時代中期における北部九州の首長と社会」、『中期古墳の展開と変革(1)』、第44会埋蔵文化財研究会
- 瀬之口傳九郎ほか『六野原古墳調査報告』(宮崎県史蹟名勝天然物調査報告第13輯)、宮崎県
- 高木恭二・蔵富士寛98「肥後における古墳文化の特性」『八女古墳群の再検討』、九州前方後円墳研究会
- 高橋克壽93「西都原171号墳出土埴輪について」『宮崎県史研究』第7号
- 田中茂93「福長院塚古墳」『宮崎県史』資料編・考古2、宮崎県
- 田中裕介95「古墳時代首長墓の動向—豊前—」『九州における古墳時代首長墓の動向』、九州考古学会・宮崎考古学会 合同学会
- 都出比呂志88「古墳時代首長墓の継続と断絶」『待兼山論叢』第22号史学篇
- 都出比呂志99「首長系譜変動パターン論序説」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』、大阪大学文学部
- 濱田耕作・梅原末治31『宮崎県西都原古墳調査報告書』、宮崎県
- 橋本達也02「九州における古墳時代甲冑—総論にかえて—」『考古学ジャーナル』496
- 樋渡将太郎01「薩摩・大隅の地下式横穴墓」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第1分冊、第4回九州前方後円墳研究会
- 福尾正彦85「女狭穂塚陵墓参考地出土の埴輪」『諸陵部紀要』第36輯
- 北郷泰道86「南境の民の墓制」『えとのす』31
- 中野和浩96『小木原遺跡群藤地区(C・D区)、久見迫B地区』(えびの市埋蔵文化財調査報告書)第16集
- 中野和浩97「地下式横穴墓の形式とその発達—川内川流域—」『宮崎県史』通史編 原始・古代1、宮崎県
- 中村耕治92『鳥越古墳群』(阿久根市埋蔵文化財調査報告書2)
- 中村耕治97「第2編先史・原始時代」『高山郷土誌』、154～164頁、高山町
- 中山豪・久富なをみ編96『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』、宮崎市教育委員会

- 長津宗重92「地域の概要―日向」『前方後円墳集成』九州編、山川出版社
- 長津宗重93『朴木遺跡』（高崎町文化財調査報告書第4集）
- 永友良典90『小木原遺跡群蔭地区（A・B地区）』（えびの市埋蔵文化財調査報告書第6集）
- 西健一郎88「地下式板石積石室墓の基礎的研究」『九州文化史研究所紀要』第33号、九州大学文学部
- 西谷正87「日向の古墳文化における大陸的要素」『えとのす』32
- 日高正晴93『古代日向の国』、148～149頁、日本放送協会
- 日高正晴・山中悦夫82「東平下周溝墓群―2号方形周溝墓―」（川南町文化財調査報告1）
- 藤本貴仁98「宮崎平野部の群集墳―横穴墓を中心として―」『宮崎考古』16
- 藤本貴仁01「日向地方の横穴墓」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第1分冊、第4回九州前方後円墳研究会
- 松木武彦00「古墳時代首長系譜論の再検討―西日本を対象に―」『考古学研究』第47巻第1号
- 松永幸寿01「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号
- 松林豊樹02『西都原100号墳』（特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第3集）、宮崎県教育委員会
- 稲岡洋道編03『史跡生目古墳群―保存整備事業発掘調査概要報告書IV―』（宮崎市文化財調査報告書第54集）
- 宮川涉ほか78「前方後円墳築造企画の基準と単位」『考古学ジャーナル』No.150
- 宮崎県93『宮崎県史』資料編・考古2
- 宮崎県97a『宮崎県史』通史編・原始古代1
- 宮崎県97b『宮崎県前方後円墳集成』（宮崎県史叢書）
- 宮崎県総合博物館88『西都原発掘75周年展図録』
- 桃崎祐輔02「九州における騎馬文化の特質と軍事的背景」『考古学ジャーナル』496
- 柳沢一男94「宮崎県古墳資料（1）」『宮崎考古』第13号
- 柳沢一男95「日向における古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号、宮崎県
- 柳沢一男・有馬義人95「宮崎県の古墳資料（2）」『宮崎考古』第14号
- 柳沢一男98a「宮崎市蓮ヶ池横穴墓群の墳丘を有する横穴墓と線刻壁画」『宮崎考古』第16号
- 柳沢一男98b「生目古墳群」『季刊考古学』第65号
- 柳沢一男99「南九州における古墳の出現」『第11回人類史研究会発表要旨』、人類史研究会
- 柳沢一男00a「西都原古墳群」『季刊考古学』第71号
- 柳沢一男00b「九州における広域首長連合と有明首長連合」『継体大王と6世紀の九州』、熊本古墳時代研究会
- 柳沢一男00c「盟主的首長墳の動向からみた日向首長連合の消長」『シンポジウム古墳の形と分布から何がわかるか？』、宮崎県埋蔵文化財センター
- 柳沢一男01「古墳時代日向の王と生目古墳群」『シンポジウム浮かび上がる宮崎平野の巨大古墳』、宮崎市教育委員会
- 森貞次郎93「自由画風線刻画人物像にみる六朝文化類型」『考古学雑誌』第79巻第1号
- 和田理啓01「日向の地下式横穴」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第1分冊、第4回九州前方後円墳研究会

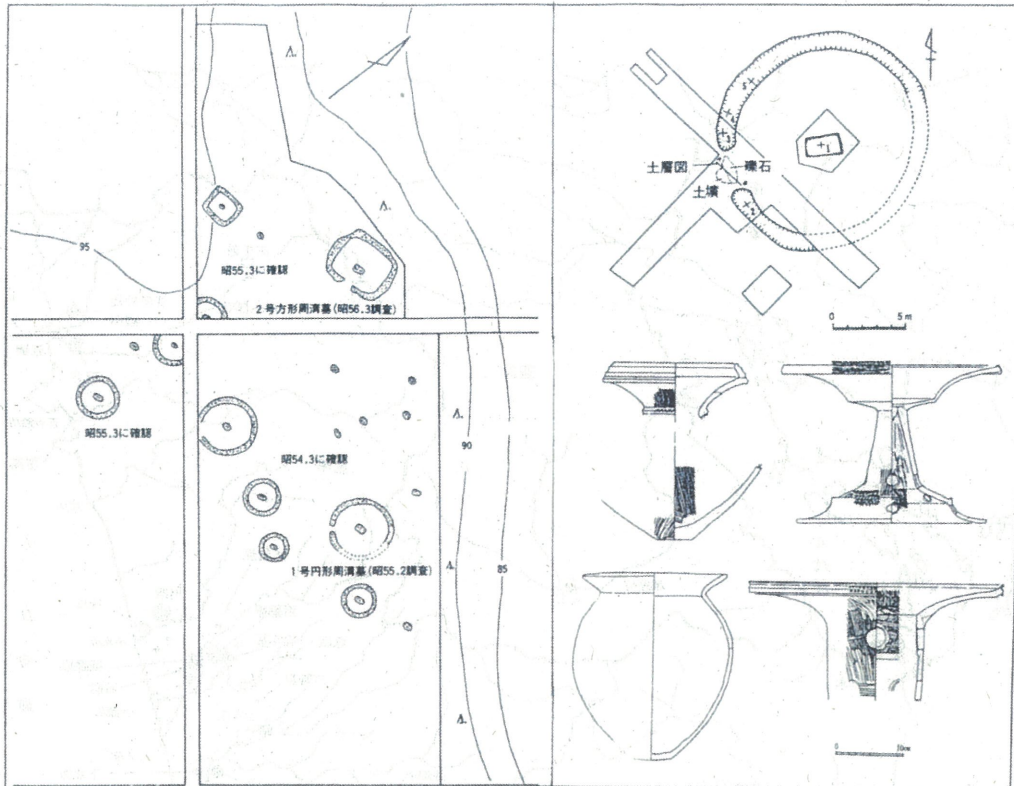


図1-1. 弥生終末期の周溝墓・土壇墓群(児湯郡川南町東平下遺跡)  
 [野間重孝ほか86「宮崎の古墳文化出現前夜」『えとのす31』より]

(右上)1号周溝墓  
 (右下)1号周溝出土土器

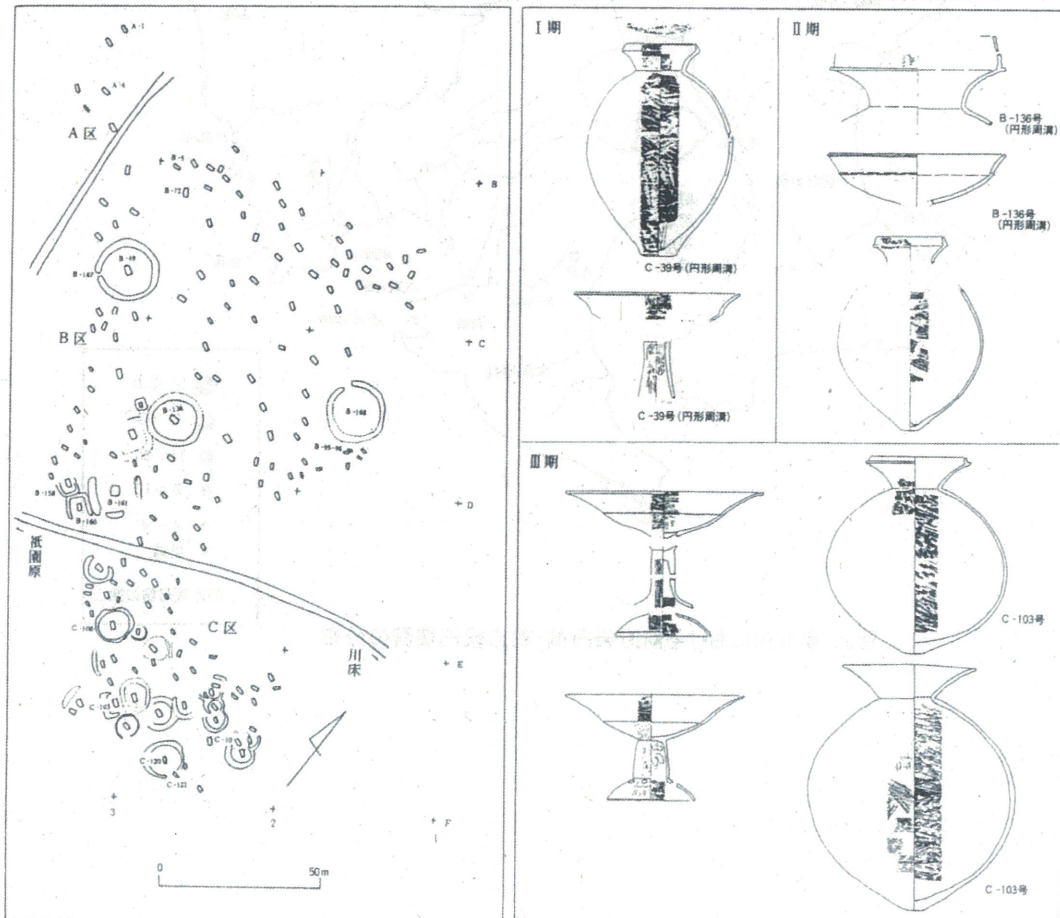


図1-2. 弥生後期～終末期の周溝墓・土壇墓群(児湯郡新富町川床遺跡)  
 [野間重孝ほか86「宮崎の古墳文化出現前夜」『えとのす31』より]

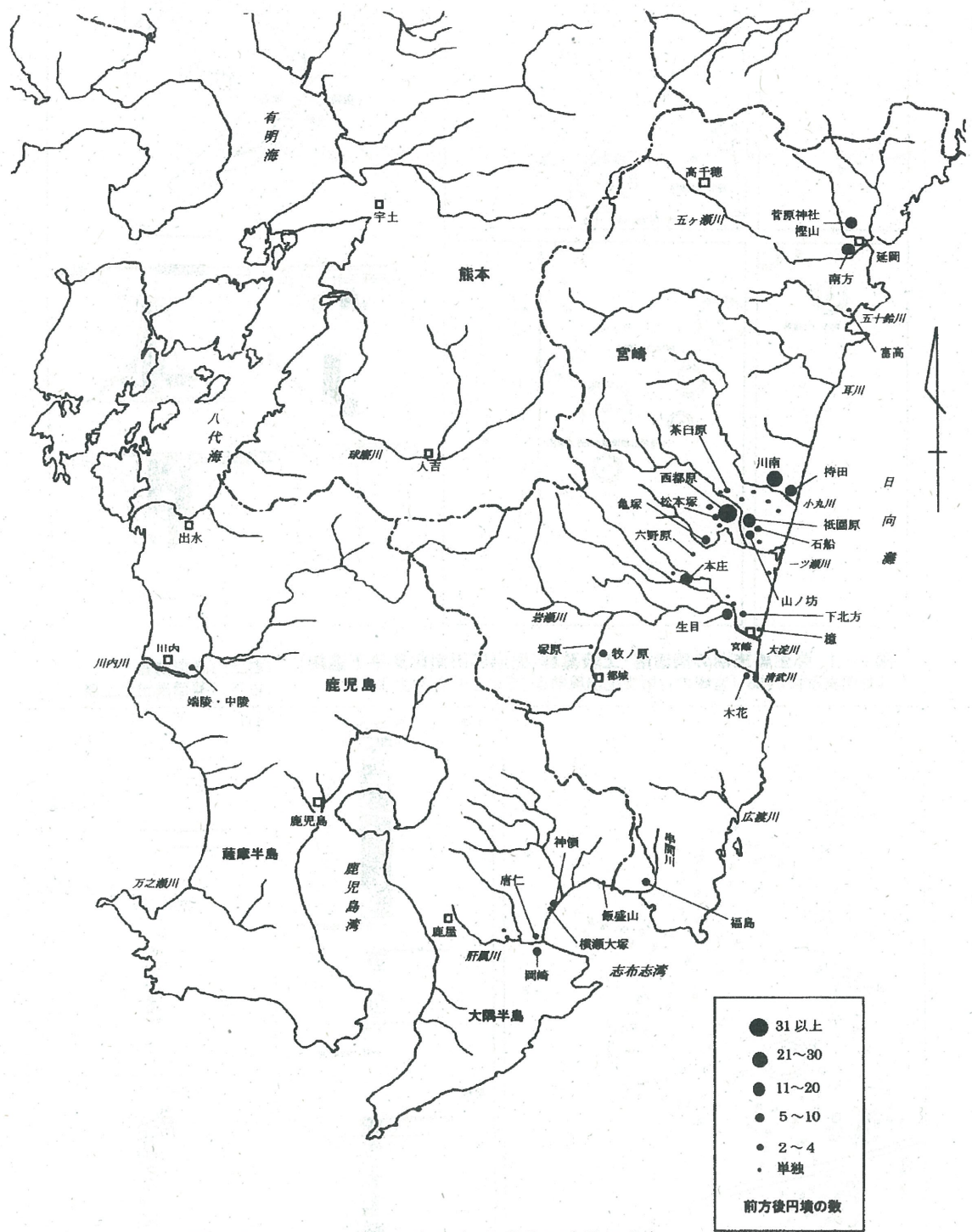


図2. 南九州における前方後円墳・前方後円墳群の分布



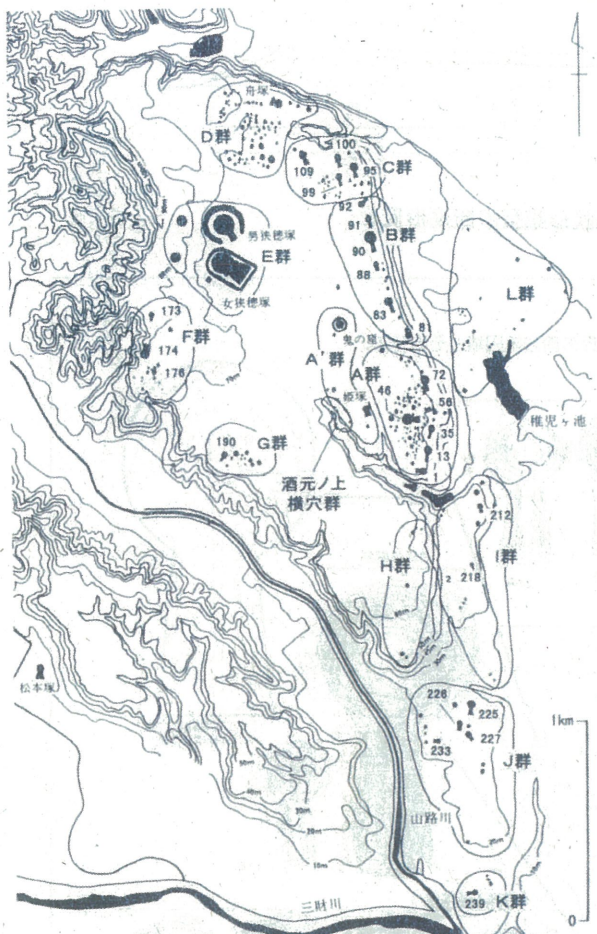


図3-1. 西都原古墳群の古墳分布とグループ

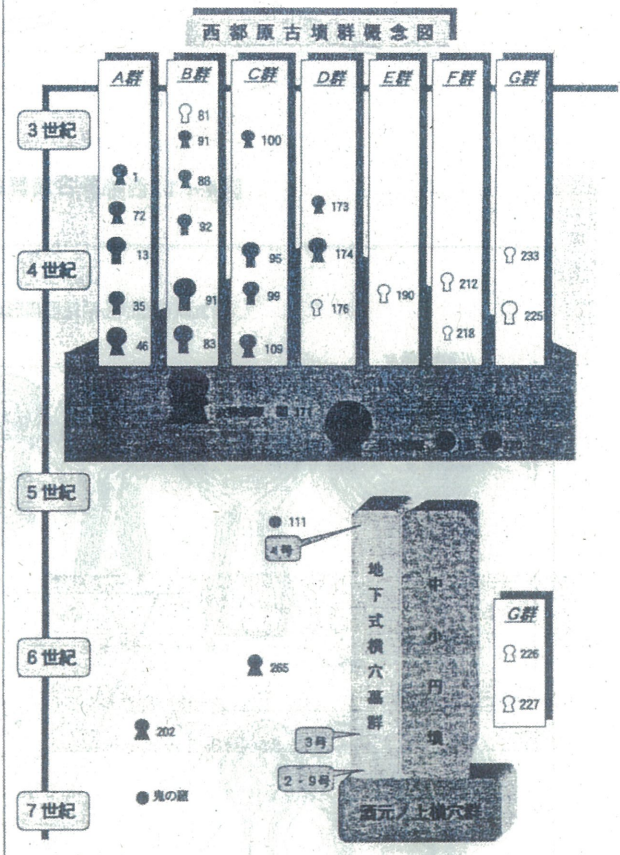


図3-3. 西都原古墳群の形成モデル

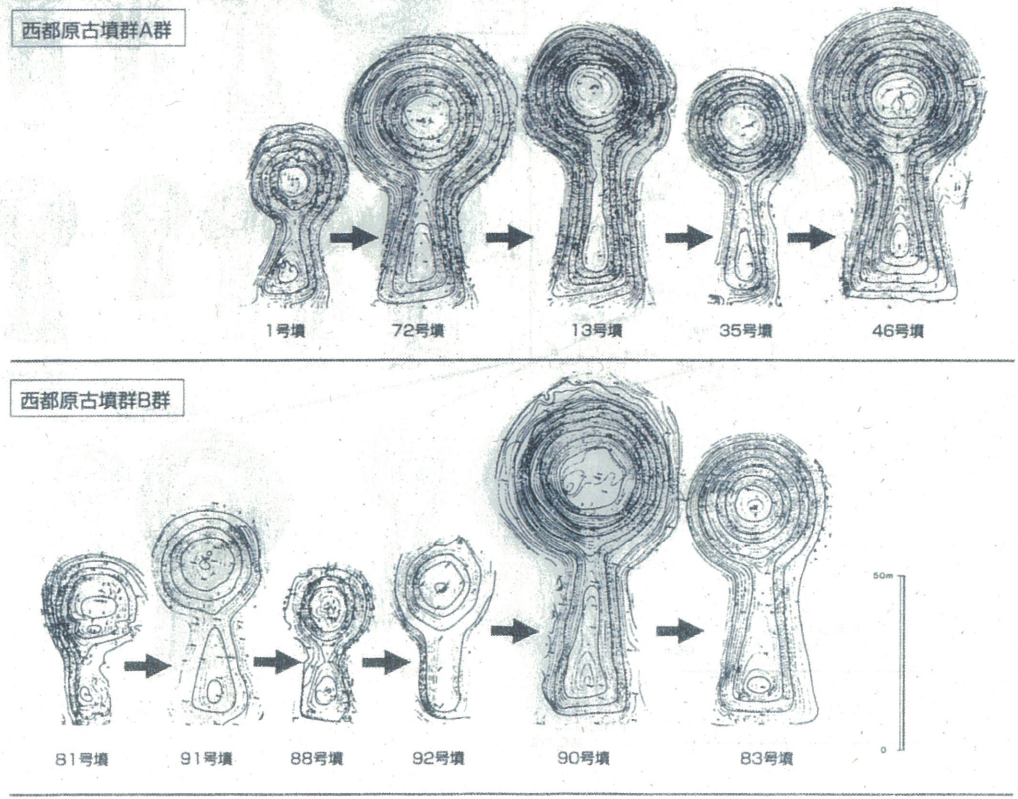


図3-2. A・Bグループの築造過程

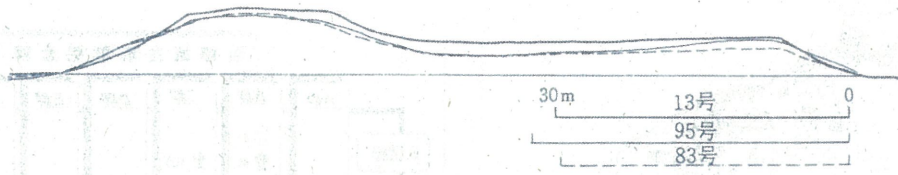


図4-1. 西都原古墳群柄鏡形類型の断面形変化

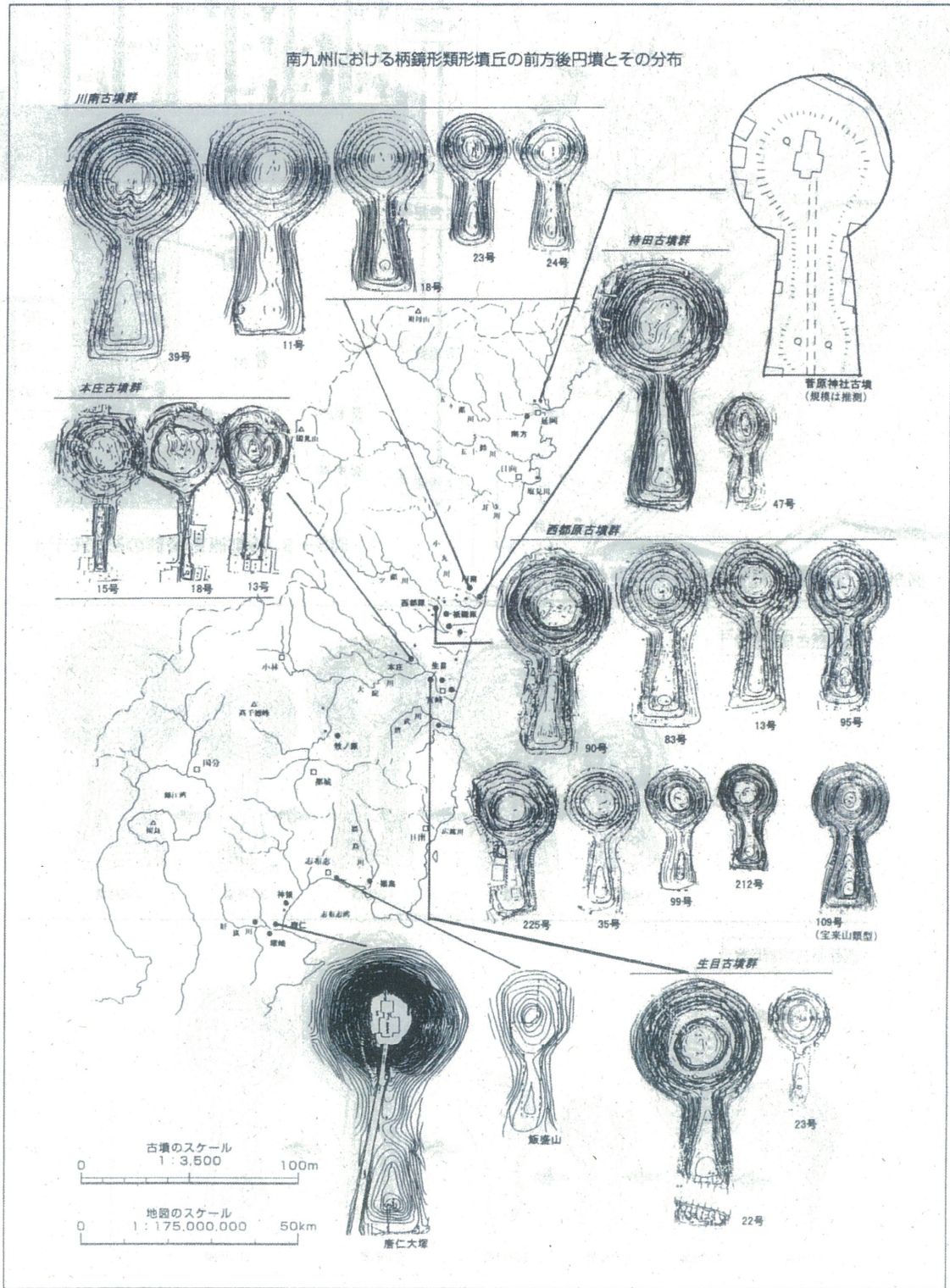


図4-2. 南九州における柄鏡形類形墳とその分布

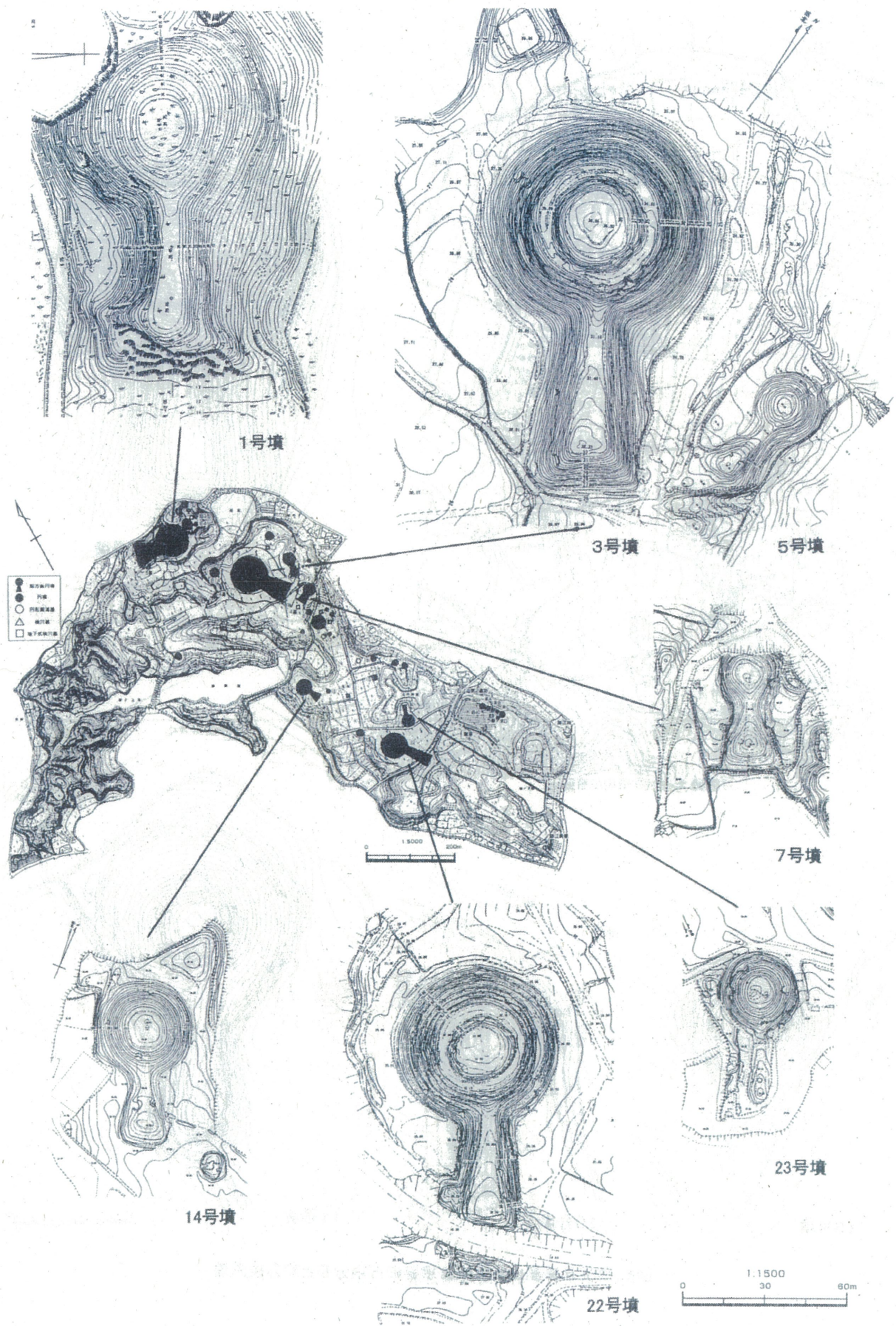


図5. 宮崎市生目古墳群の古墳分布と前方後円墳



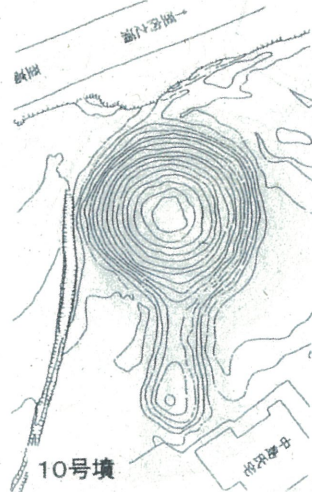
塚崎古墳群 (古墳の位置図)



40号墳



16号墳



10号墳



11号墳



図6. 鹿児島県高山町塚崎古墳群の古墳分布と前方後円墳

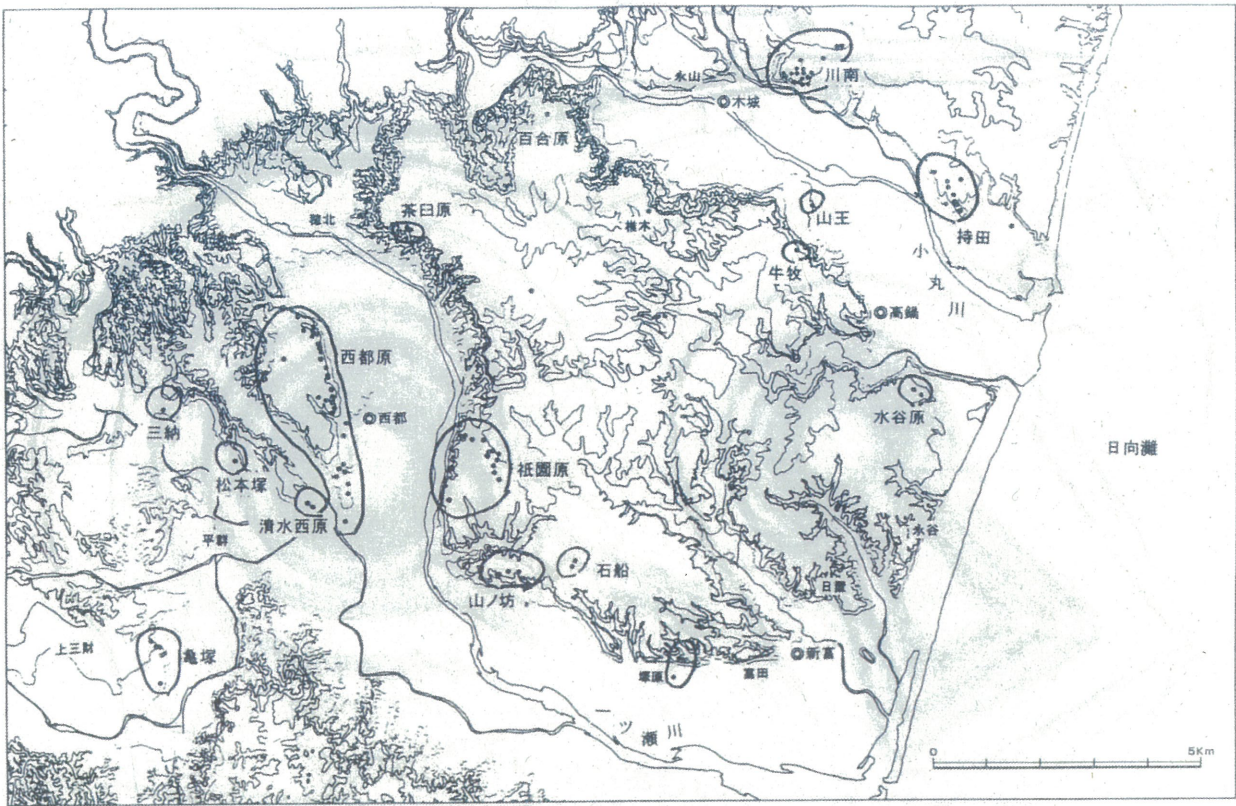


図7-1. 宮崎平野北部の主要古墳群と前方後円墳 (黒丸は前方後円墳)

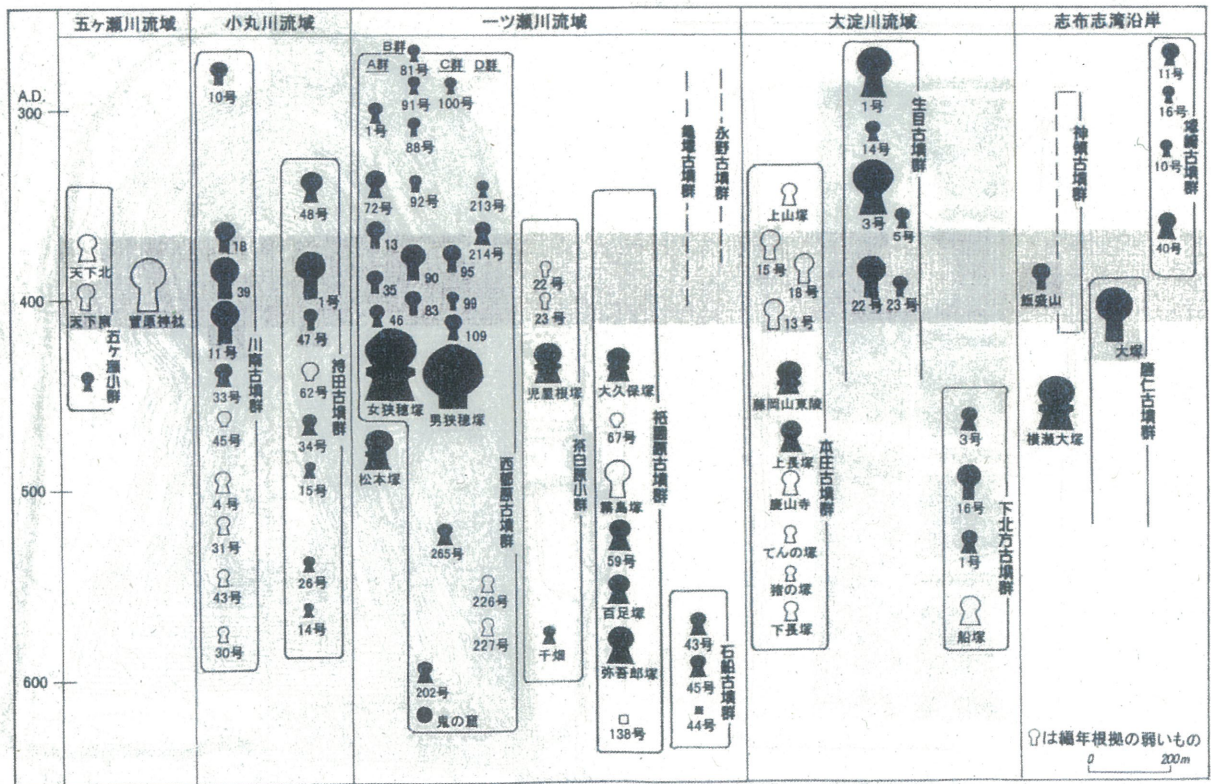


図7-2. 日向大隅地方の主要古墳群の変遷過程

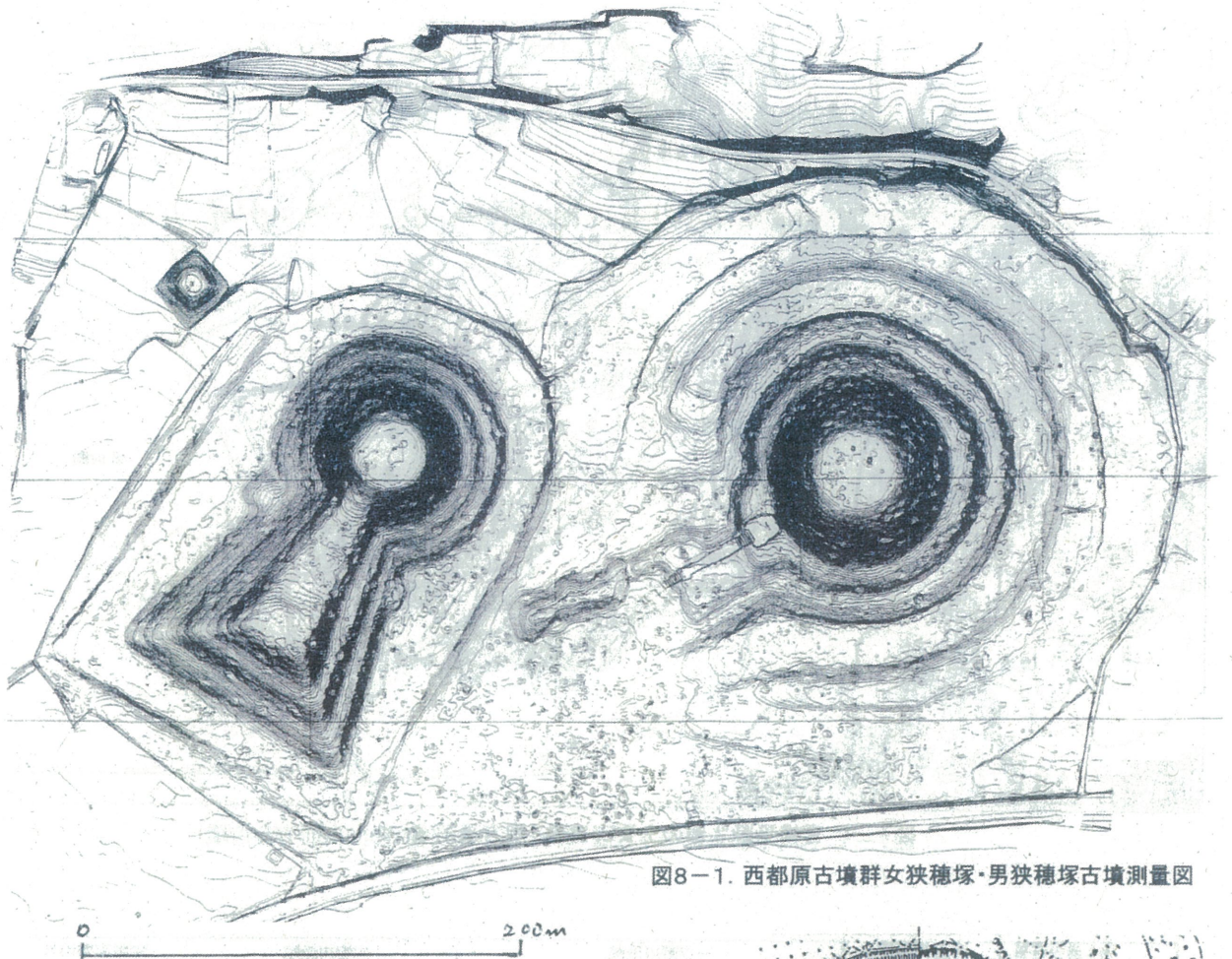


図8-1. 西都原古墳群女狭穂塚・男狭穂塚古墳測量図

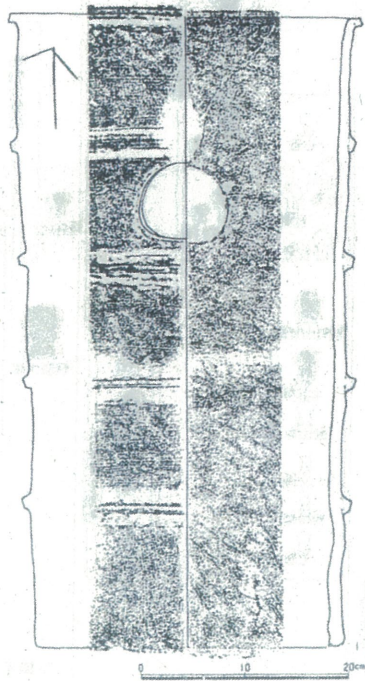
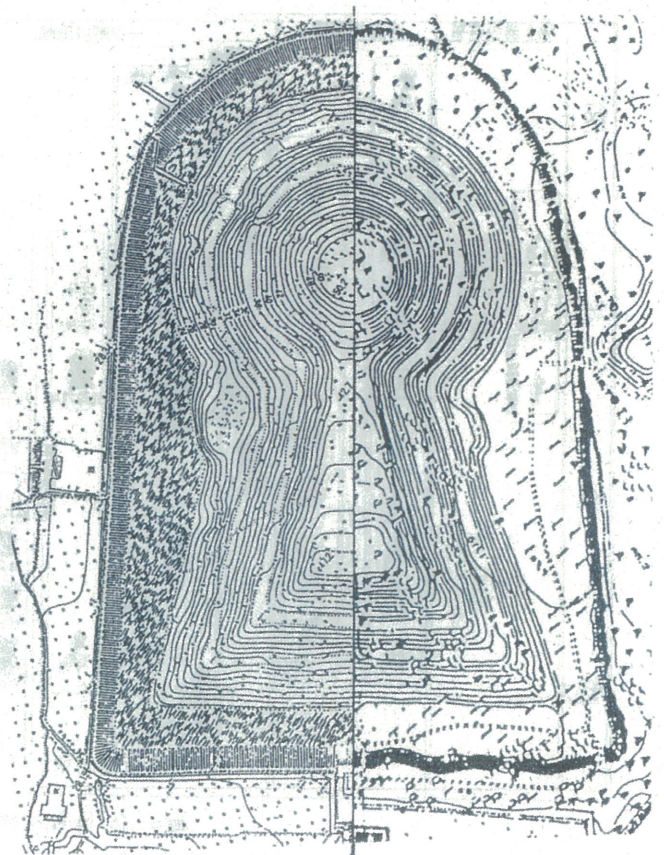


図8-2. 女狭穂塚採集の円筒埴輪



仲津山古墳 (1/3395) ← → 女狭穂塚 (1/2315)

図8-3. 女狭穂塚と仲津山古墳の墳形関係



図9-1. 新潟町祇園原古墳群分布図

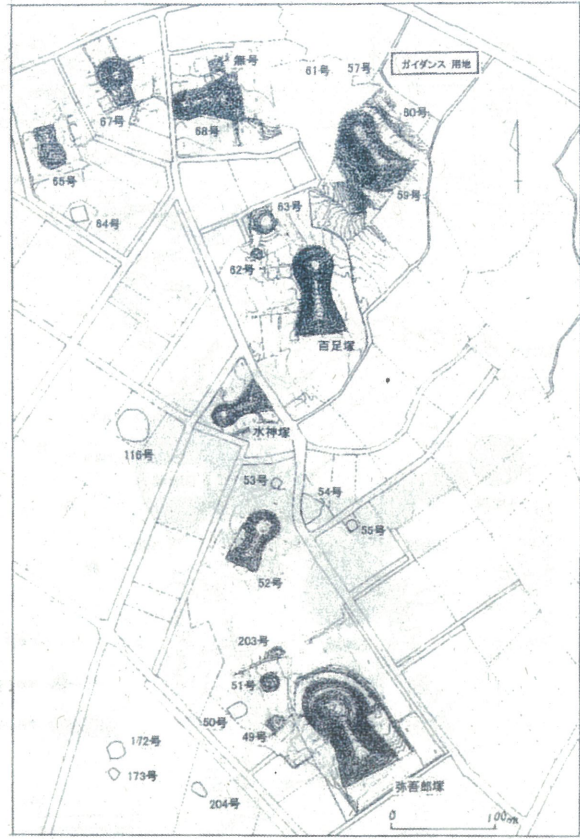


図9-2. 祇園原Aグループの前方後円墳分布状況

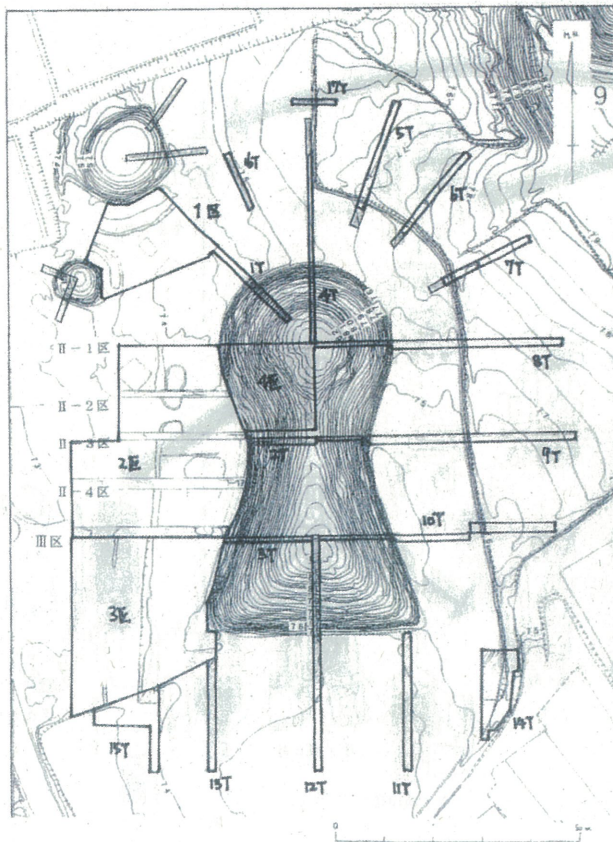


図9-3. 祇園原・百足塚古墳調査状況

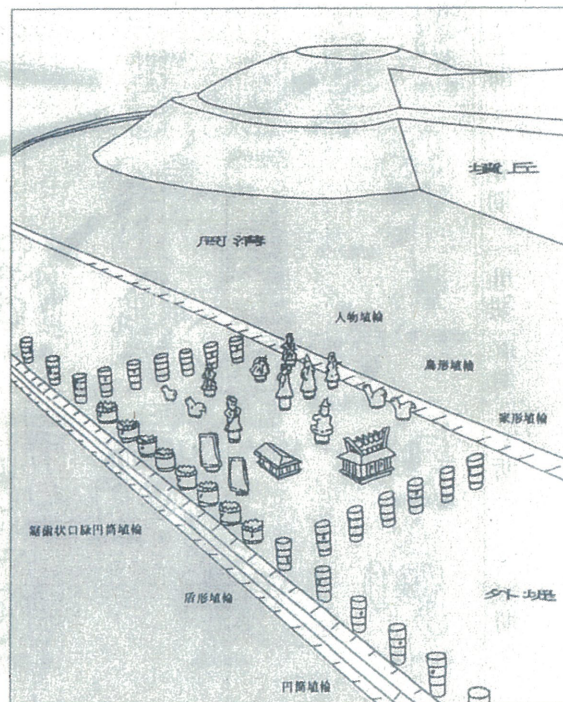


図9-4. 百足塚古墳外堤部埴輪配列復元図

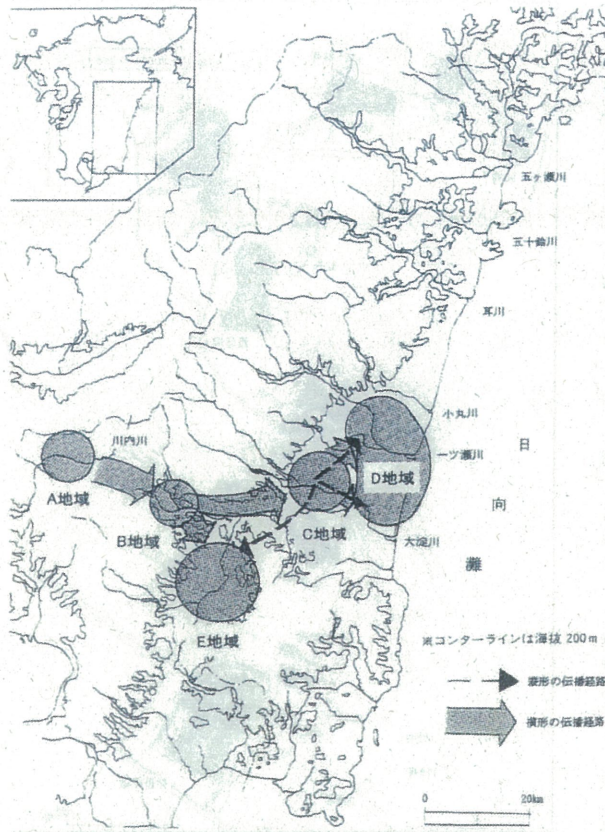


図10-1. 地下式横穴墓の拡散過程[和田01より]

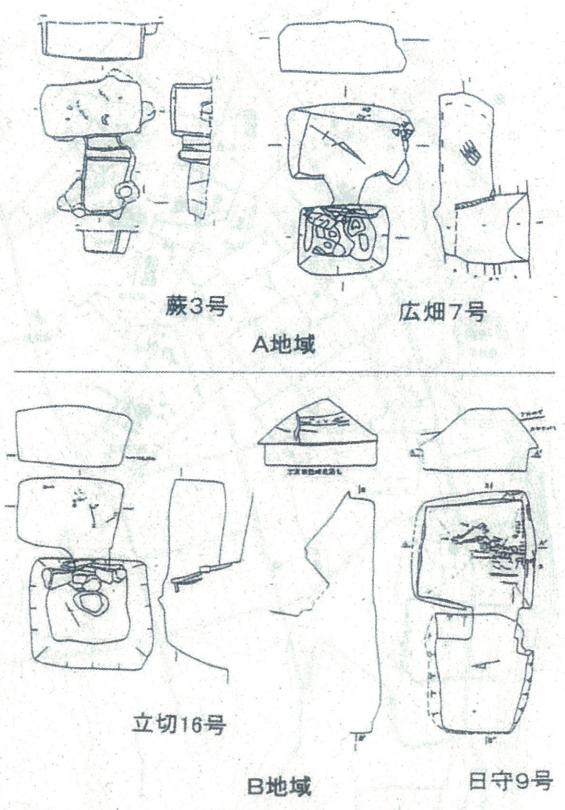


図10-2. 地下式横穴墓の形成過程[和田01より]

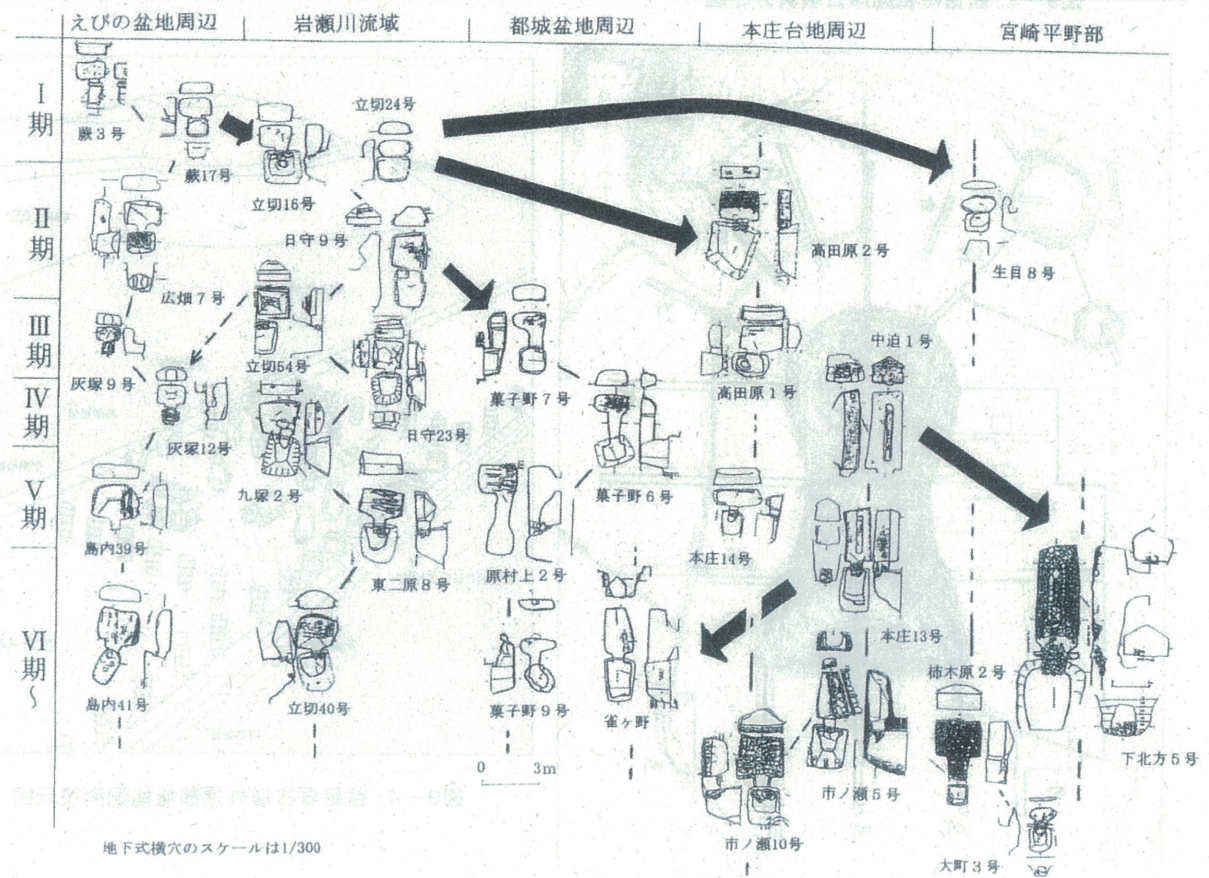


図10-3. 地下式横穴墓の展開過程と編年[和田01より]



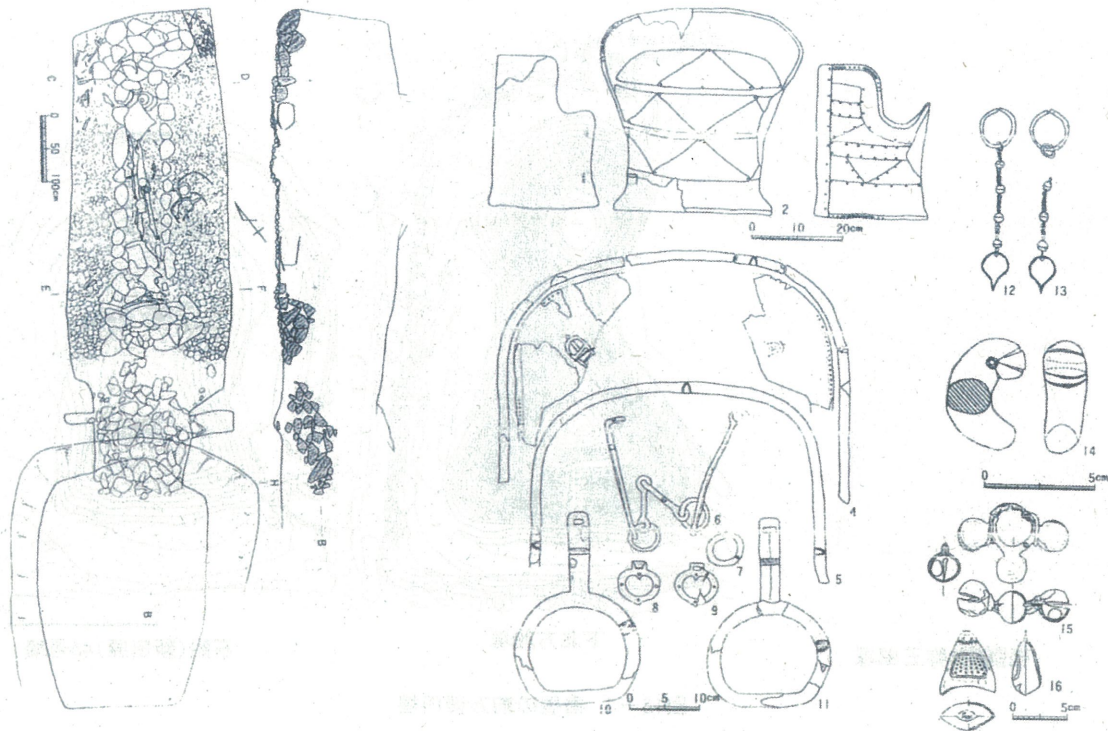


図11-1. 宮崎市地下式5号実測図と出土遺物

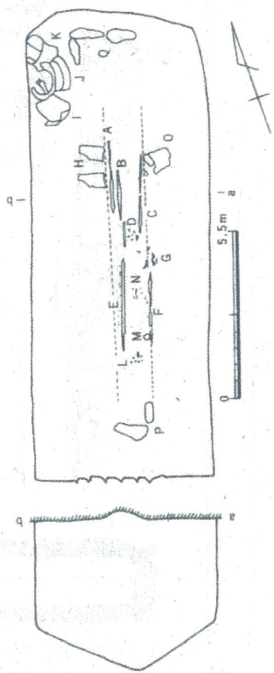


図11-2. 西都原地下式4号実測図

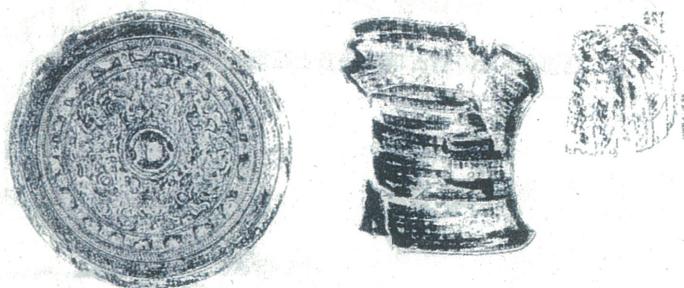
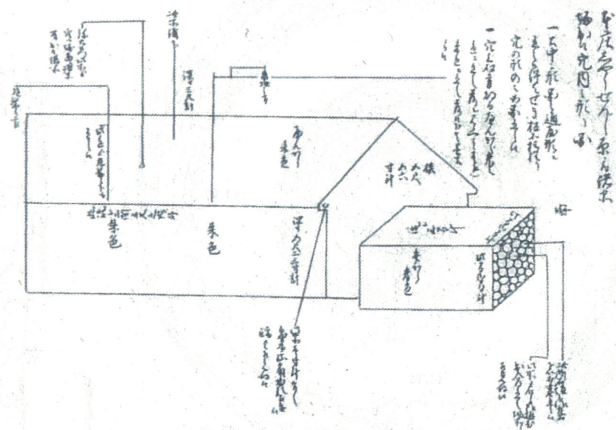
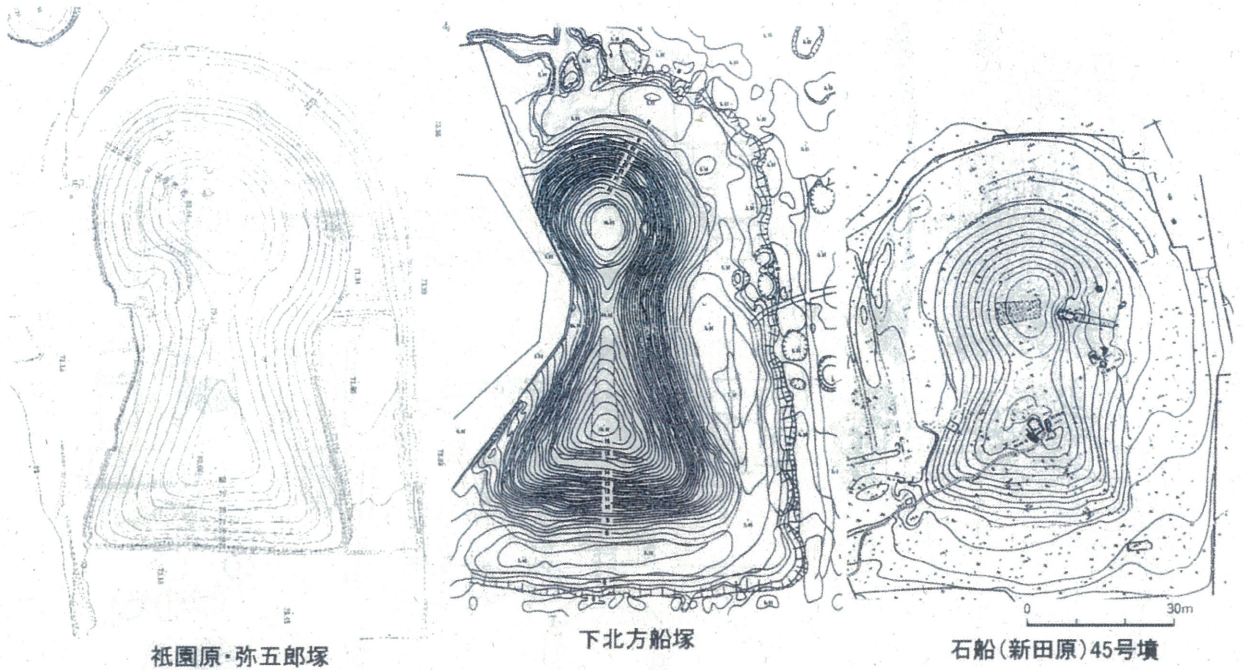


図11-3. 本庄古墳群猪の塚古墳の地下式横穴墓と出土遺物の写真

[池畑88による]

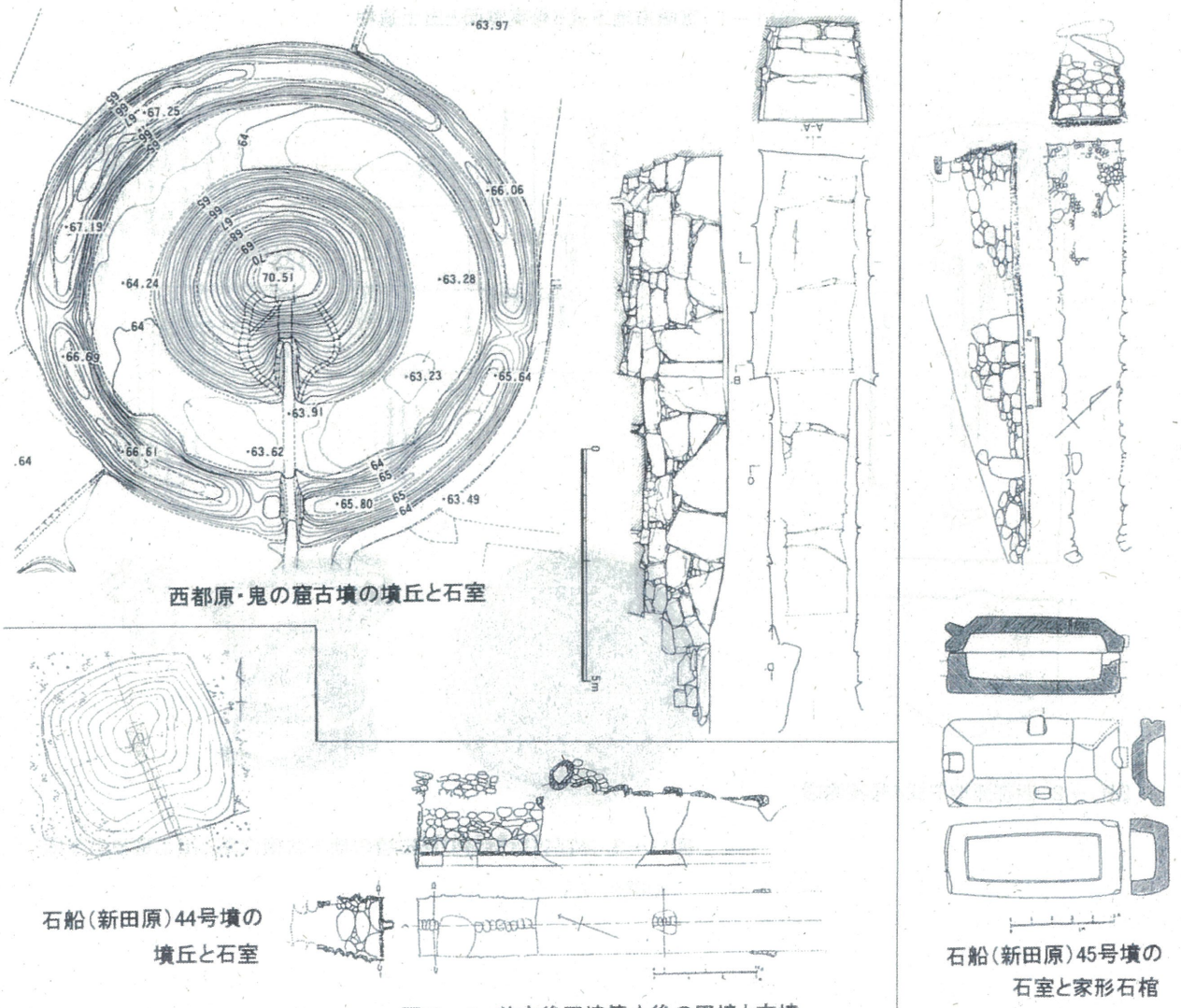


祇園原・弥五郎塚

下北方船塚

石船(新田原)45号墳

図12-1. 最後の前方後円墳



西都原・鬼の窟古墳の墳丘と石室

石船(新田原)44号墳の  
墳丘と石室

石船(新田原)45号墳の  
石室と家形石棺

図12-2. 前方後円墳停止後の円墳と方墳